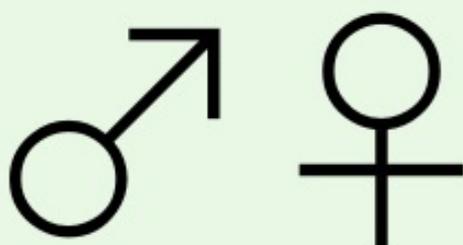




レプリカ



K・ボーイ

プロローグ

男は、ロンドン市内にあるカフェに入って周りを見渡す。昼下がりの店の中は、カウンター席に若い男女の客だけだった。奥の席には、若い日本人の女が座っていた。男が女に近づく。

「待たせたね」と、男が笑みを見せて、女とテーブルを挟んで向かい合わせに座った。

ウェイターが注文を聞いて来た。男はコーヒーを頼んだ。

「考えてくれたかい？」

男は知りたいことを尋ねた。

「・・・・・・・・」

女は不安そうな顔をした。

「やはり、私・・・・・・・・無理です」

女は小さな声で答える。

「そんな！ 生命というものを何と考えている！！」

男が失望したように声を荒げた。それに驚いたように、カウンター席の客がこっちを見る。

それに気付いて男は、「せっかく掴んだチャンスじゃないか。ここで頑張れば、夢も叶うかもしれない。こんなことであきらめるのか？」

男は、真顔になって小声で説得する。

「でも、産んで育てる自信がありません」

女は下を向いたまま言う。

「大丈夫だ。僕に協力してくれたら、金銭的な工面をしよう。それに大学に残れるように、僕がなんとかしよう。もう一度、考えてみてくれ」

男は、畳みかけるように説得をした。

東洋人の男は、目隠しをしたまま手錠をかけられ、二人の体格のいい男に体を挟まれて、部屋に連れ込まれた。小さな机の椅子に座らせ目隠しを取る。東洋人の男は、天井の蛍光灯に目を細めた。

「どういうことだ！」

東洋人の男は、体格のいい男に向かって、食ってかかって言う。男二人はスーツ姿だった。一人の男が部屋を出て行き、もう一人の男が扉横に立つ。部屋は、一面に灰色の壁で窓がなく暗い空間だった。

静かに扉が開いた。白髪の男が入ってくる。

「いったい、あんた達は誰だ！ いきなり、人さらいのように車に乗り込ませて、おまけに手錠までして、ずいぶん手厚い歓迎だな！！」

東洋人の男は、怒りで声を荒げた。

「まあ、そんなに怒るなよ。こっちは君を保護したつもりだ」

白髪の男は、立ったまま涼しげな顔で言う。

「君のことは調べてわかっている。君は、アイルランドで窃盗事件を起こした逃亡犯だ。そうなのは、奴らのやり方に乗ってしまったというのが、正しい説明かもしれない」

白髪の男は淡々と言った。

「俺は一般人だ。そんな犯罪者なんかじゃない」

東洋人の男は、強く否定した。

「さっきも言ったが、すべてわかっている。君は、恋人に会いに来たんだろう」

白髪の男は、スーツの内ポケットから、一枚の写真を取り出して、机の上に置いた。

写真は、若いイギリス人の女が写っていた。それを見るなり、東洋人の男の顔色が変わる。

「彼女は、君の本当の正体を知らないようだな」

「・・・・・・・・」

東洋人の男は、しばらく黙り込んだ。そして、

「あんた達は、いったい何者だ？ ひょっとして、イギリスの政府機関の者なのか。確かに俺は、アイルランドから逃げてきた。俺を政府に引き渡すため、何かの交渉にでも使う気なのか？ だが、彼女は関係ない」

東洋人の男は、あっさりとして認めて、強い口調で訴えるように言う。

「心配するな。別に彼女のことを、どうしようとは思ってはいない。君が、我々の依頼を受けて

成功すれば、君にイギリス国籍を与えて、彼女と一緒に暮らすことを許してもいいと思っている」

「えっ!？」

東洋人の男は、思いもよらない言葉に、一瞬目を丸くした。

「今、何と言った？」

「要するに、君に仕事を頼みたい。これは、イギリス国家のプロジェクトに関わることだ」
白髪の男は真顔で言う。

東洋人の男は、信用できない様子で黙り込んだ。

「君には、選択が二つしかない。ひとつは、我々に協力するか。もうひとつは、このまま逃亡犯として、アイルランドに戻されて、冷たい牢獄（ろうごく）に入る生活をするか。さあ、どっちにする？」

白髪の男は、穏やかに話すも目つきは鋭く、相手を追い込むような言い方をする。

東洋人の男は、観念した様子で受け入れることを決めた。

「何をすればいい？」

東洋人の男は、白髪の男から顔をそむけて聞いた。

「日本に行って、ある人物から、暗号入りの写真をもらってほしい。君にも関係あることだ」
白髪の男は意味しげに言う。そのことに反応して、

「自分と……一体誰だ？」

東洋人の男は、興味深く尋ねた。

「くわしいことは、ここに行ってくれ。使いの者が待っている。それから、今からは日本語を使うように……話せるよな」

白髪の男は、指定した場所を書いたメモ紙も差し出した。

東洋人系の男は、メモ紙を手にした。

二日後の夜

東洋人の男は、レンガ造りの倉庫がある港町にいた。近くにはテムズ川があって、遠くにライトアップしたタワーブリッジが見える。

東洋人の男は、街灯の下でメモ紙を見る。確認するように周りを見渡した後、ゆっくりと歩き出した。倉庫は、同じ高さの大きさのものが列を成していた。正面には、両開きの鉄扉で上に番号が書いてある。それを見ながら12番の倉庫の前で、ピタリと足を止める。そこが、メモ紙に書いてある場所だった。

正面扉横にある小さなドアが、人の出入り専用だった。

あらかじめ、鍵は掛かっていないことを知らされていたため、ドアを開けて中に入った。倉庫の中は、冷たい空気が流れてひんやりとする。奥に机があって、その上に蛍光色のスタンドが置いてある。その明かりから、薄らと壁一面にダンボールが、山積みになっているのが見える。おそらく、船に積み下ろしたものだろう。

「待っていたわよ」

人の気配を感じると同時に声がした。目の前のダンボールの横から、女が現れた。女は、スラリと背が高く、紺のジャケットにストレートパンツ姿だった。

「君がミス・キャットなのか？」

「ええ、そうよ」

「顔は見れないのか？」

女は、顔が半分ほど隠れる丸いサングラスをしていた。

「顔を見ないほうが、あなたのためになるわ」

女は、忠告するような言い方で答えた。

「あんた達は、俺に何を期待している？」

東洋人の男は、事の真相も知らずに使われていることに、腹を立てた。

「日本語は、上手く話せるのね」

女は、男の訴えを無視するように、言葉の上手さに感心する。

「ひとつだけ教えてあげるわ。あなたは、このイギリスでは、大事な人物なの。今国の状況が変わって、あなたも、今後どうなるか、わからないから、身柄を拘束したのよ」

「それは、一体……」

東洋人の男は耳を疑う。

「あなたは、イギリスで生まれて、すぐに両親が亡くなって施設に入った。その後、アイルランド人の夫婦が、里親になってくれた。だが、十七歳の時、交通事故で里親を亡くした。その後、ひとりで真面目に生きていた。一ヶ月前、ある傷害事件に巻き込まれて、その後は、謎の組織から追われて、逃げるような生活が続いている」

女は経歴を淡々と話した。

「……」

「あなたを拉致するために、ある組織が動いた。そして、あなたは、知らない異国へ行かされるはずだったのよ。でも、その途中、あなたを助け出したのは、私達の組織の連中なのよ」

「何だって!？」

東洋人に男は、身に覚えがある出来事に困惑する。

「君達は、何者なんだ？」

「安心して、私達は、あなたの味方よ」

「味方だって、ふざけるな！ 恋人まで、脅しの道具に使ったじゃないか！！」

東洋人の男は、納得しない様子で全面に怒りを出した。

「冷静に考えてみて。このまま、アイルランドに帰れば、あなたは犯罪者で捕まる。でも、刑務所ではないわ。アイルランド政府から、アメリカ政府の配下する、特別な研究施設に行くわ。

でも、私達に協力して成功すれば、恋人との幸せな生活が約束されるはずよ」

「アメリカ政府！？・・・・・・・・・・」

東洋人の男は、女の言っていることに見当がつかない。

「あなたの新しい名前は、マック・ヤマグチ。ここに書いてあるわ。日系3世ということにするわ。明日、ここから船が出る。一週間後、日本の横浜に船が着くから、そこで、また指示する」

女は説明を終えると、パスポートを手渡した。

① 父の死

「急な発作があって、倒れたまま亡くなられたみたい」

父親である福岡真一の急死を聞かされて、実家に駆けつけた夏彦に、妻の亜希子が涙ながら告げた。真一は、ここ数日体調を崩して寝込んでいた。

夏彦は、仰天したように目を丸くして、寝室のベッドに近寄る。とても死んでいるようには見えない。まだ生気があるようで、おだやかな表情で眠っているようだった。

「旦那様から、頼まれて買い物に出ていました。帰って来た時には、廊下でお倒れになっていました……」

家政婦の宮崎文子は、取り返しのつかないことをしたと言わんばかりに、青ざめた表情で、夏彦に詫びるように頭を下げる。

「文子さんが悪いわけじゃないわ。頭を上げて」

亜希子は、文子をなだめるように言う。

「薬は飲まなかったのか？」

夏彦が、文子に確かめるように聞いた。真一は心臓に持病があった。発作があると、痛み止めの薬を飲むことになっている。

「私が外に出る前に、ベッド横のナイトテーブルに錠剤を置いていました。旦那様も、そのことはご存じだったはずです」

「お医者さんの説明では、痛みのほうが強くて、薬まで服用できる状況じゃなかったみたい」

亜希子が付け出すように説明した。

夏彦は、父親の死が、こんなにあっけないものだとは信じられなかった。

次の日から、喪主となる夏彦は、慌ただしかった。大学教授だった真一は、参列者も多かった。勤め先だった教授仲間、大学の職員、教え子だった卒業生、その他、研究で真一に世話になった知人といった、多くの人間が葬儀に参列した。そのことで夏彦は、父親が残した功績の偉大さを改めて気付かされた。

通夜と葬儀で息つく間もなく、あっという間に火葬も終えた。

夏彦の実家は鎌倉にある。山手にある静かな住宅街だった。

木造造りの和風家屋で平屋だった。小さいながらも、濡れ縁で造られた中庭がある。

夏彦は、小さな祭壇に真一の骨壺を供えた後、ガラス戸を開けた。中庭から、春の心地よい風が入り込んでくる。

夏彦は、黒のネクタイをむしり取り、ドスンと畳に座りこんであぐらをかいた。無事に喪主を勤め終えた安堵感が、そうさせた。

「おつかれさま」

亜希子が夫を労うように言って、お茶を持ってくる。

「亜希子も疲れただろう。自分ひとりじゃ、親父の葬儀もろくにできなかったよ。ありがとう」

夏彦は、応接台に置かれた湯呑に口をつけて、亜希子に労いと感謝の気持ちを伝える。

「しばらくは、ここから通勤しようと思っている。君は、東京に戻っていいから」

夏彦は、薬品会社で新薬開発の仕事をしている。勤め先は東京だった。

「私も残るわ。遺品の整理なんかあって大変でしょう」

亜希子は、実家に残ることを告げる。

「そう言ってくれると助かるよ。遺品整理っていっても、親父が残したもののなんか、さっぱり自分にはわからないよ。親父とは、ろくに話なんかしなかったからな……」

夏彦が苦笑いした。

「あっ！ そうだわ」

亜希子が遺品という言葉で、思い出したように部屋を出て行く。そして、「明日、お父様の携帯電話の解約をしていいかしらん？」と、折りたたみタイプのガラケー携帯を持ってきた。

「頼むよ……そうだ、見せてくれないか？」

夏彦が、携帯電話を受け取る。

「親父は、家では携帯電話を使うことがあったのか？」

「たぶん、携帯電話は使っていないと思うわ。いつも、コードレス電話を使っていたから。でも、亡くなる三日前に誰かから、お父様の携帯電話に電話が入っていたわ」

亜希子は、療養中の真一に付き添っていた時、携帯電話が鳴っていることを覚えていた。

「相手は誰だったんだ？」

夏彦が興味深く聞く。

「身に覚えのない電話番号だったから、電話には出なかったみたい」

「そうか……じゃ、なぜ、亡くなる間際に持っていたんだろう？」

夏彦が怪訝な顔する。真一は、自宅の廊下でうつ伏せに倒れて亡くなっていた。右手には、携帯電話を持っていた。急に体調を悪くして、誰かに連絡しようとしたことは想像できた。だが、なぜ、使えなかったコードレス電話を手にしなかったのか。亡くなった日の電話履歴を見たが、誰とも話していなかった。真一が亡くなる間際、誰かに電話をしたかったのか。それを確かめることは、今となっては出来ない。夏彦は、それ以上考えることをやめた。

「じゃ、明日頼むよ」と、夏彦は、携帯電話を亜希子に渡した。

「それから、もうひとつ」

亜希子は、携帯電話を受け取ると同時に、夏彦に腕時計を渡す。

「これは……！！？」

夏彦は、アールドアンドサンの腕時計を手にした。その瞬間、懐かしそうな表情をした。昔モデルの自動巻で、黒皮は劣化していたが、今でも時計は動いている。真一が、イギリスにいる時に買ったもので、よく大学に勤めている頃に使用していたものだった。

「お父様、これをガウンのポケットの中に入れていたわ」

「どうして、これを……！！？」

夏彦は、手のひらに腕時計を置いて見る。ずいぶんと、その腕時計を見ることはなかったが、亡くなる間際に持っていたことが不思議に思えた。だが、どう考えてみても、真一の亡くなる間際の行動や心理は、夏彦には理解不能だった。それでも、その腕時計は、真一の形見になる。

「これは、自分が持っておくよ」と、夏彦が受け取る。

「あら、もうこんな時間ね。買い物に行ってきますね」

亜希子が、チラリと自分の腕時計を見て、夕食の準備のことを考えた。

「なあ、今夜は、どこか外に食べに出ないか？」

夏彦は、疲れている亜希子を気遣って食事に誘う。

「今日は、ここにいて下さい。葬儀には参列できなかった方が、お参りに訪ねてくることもあると思いますから」

「それも、そうだな。亜希子、すまないが頼むよ」

亜希子の気遣いに、夏彦は家にいることにした。

亜希子が外に出た。

夏彦がひとりになる。静寂があった。祭壇にある真一の写真を見つめた。夏彦にとって、父親は身近な存在でありながら、一番遠い存在だった。真一は、イギリスで生活をしていた時期がある。向こうの大学で、研究員として働いていた。その時、夏彦が生まれた。

夏彦の母親は、産後に体調を崩して、療養をするために家族で帰国する。その後、すぐに母親は亡くなった。それ以来、真一と夏彦の二人だけの家族になった。

夏彦は、父親の愛情を感じることがないまま大人になった。大学での研究が忙しかった真一は、ほとんど家に帰ることはなかった。そのため夏彦は、中学生まで祖母の家で生活をしていた。たまに家に帰ってくると、子供心に、父親に遊んでもらおうと甘えたりもしたが、真一は、かまうことをしなかった。それでも、父親のことを好きだった時期もあった。

中学生になって、偉大な父親を持つ子供だと、周囲の人間が目を向けるようになった。なぜ、そう言われるようになったのか、夏彦自身わからなかった。そこで、父親がどんな仕事をしているのか、興味本位で大学に行った時、そのことがわかった。

夏彦が、真一の息子だと知っている女性研究員を訪ねると、講義会場を案内された。会場の扉を開けて覗き込むと、夏彦は仰天した。会場内の席は、生徒でぎっしりと埋まっていた。その中心に白衣姿の真一が、何かを説明している。その姿は、どこか凛々しく有能な学者に見えて、子供心に格子よく思えた。

「お父さん、この大学で一番の人気者の先生よ。でも、これからは、もっと有名にもなるわ」と、女性研究員は誇らしげに言った。そして、そのことは本当になった。

大学の研究チームが、人間の遺伝子細胞の進化論を発表した。この論文が学会での評価を受けた。そのことが大きく報道されて、その研究の第一人者が、大学教授の真一だった。

夏彦は、テレビのニュースから、真一が遺伝子工学の研究をしていることを知った。当時、猿の遺伝子細胞から、複製の猿の細胞を誕生させた。そのことが、人間にも活用できる可能性があることが、医学界でも大きな影響を与えた。現に人間の臓器を、遺伝子細胞で作り出す研究も始まった。その先がけを作ったのが、真一だった。

人のために、何か役に立つことを成し遂げる。そんな父親のことが、夏彦は誇らしかった。そして、いつしか子供心に、父親のようになりたいと思うようになった。その時から、夏彦は、科学や物理に興味を持つようになった。

高校受験の時、進路相談を真一に相談したことがあった。夏彦は、真一のように、人の役に立つような学者になりたいことを告げた。真一は、息子が同じ道に進むことを嬉しく思ってくれ、夏彦は信じていた。だが、それとは違う言葉が返ってきた。

「人の役に立つこと……おまえには無理だ」

真一は、ゆっくりとした口調で否定的に言う。

「どうして……!?」

夏彦が不服そうに聞いた。

「人のためになることで、何かを研究して作り出すことは、素晴らしいことかもしれない。だが、それは、自分自身の責任と覚悟がいる。おまえには、そういうものがあるのか？」

真一は、するどい目つきで、問い詰めるような聞き方をする。

夏彦は、真一の勢いみたいなもので、一瞬怯んだ。そして、何も反論できなかった。その時の真一は、父親ではなく学者の顔つきだった。

夏彦は、もう二度と真一の前で、夢など語らないことを決めた。それ以来、真一のような優しさのない男には、なりたくないと思った。やがて、真一のことを避けるようになった。

大学生になった時、夏彦は家を出た。父親の元を離れたかった。東京の大学に進み、ひとり暮らしを始めた。よく友人が、親元を離れると、親のありがたさを感じることを話していたが、夏彦自身は実感がなかった。真一からは、学費や生活費を出してもらっていたが、どこか、あたりまえのような気持ちだった。真一から、親らしい優しさなど感じなかったことが、そういう気持ちにさせたのだろうか。真一自身も、仕送りすることで、どこか親らしいことをしているように思っていたようだった。

大学は薬学部を選考した。時が経つても、夏彦には、科学や物理の世界は、おもしろく思えた。特に人間の体のしくみには、追求をすればするほど謎があり、魅力的な興味を誘う。そのため、医療関係の仕事をしたと考えていた。

首席で大学を卒業後、大手薬品会社に就職する。当時は景気も悪く、新卒には、就職氷河期とも言われていた。だが、書類選考から面接と、スムーズに進んで採用された。この時は、夏彦自身も、大学時代の頑張りが評価されて、会社に採用されたと思い込んでいた。しかし、それは違っていた。

入社できたのは、真一のおかげだった。直接、夏彦の就職先に口を利いたわけではない。真一は、医学界でも影響力がある人間だった。会社としては、将来的に大きなビジネスが出来る可能性が生まれる。そのため、息子である夏彦を採用することで、真一と会社とのつながりを作るのが目的だった。そのことを入社後、直属の上司から聞かされた。それでも、会社を辞めようとは思わなかった。医薬品の研究開発の仕事ができたからだ。

自分が、やりたい仕事があって就職しても、会社組織の中に入れば、思うような部署にはいけないことはよくある。その点、夏彦は恵まれていると思った。おそらく、真一の息子だということで、自分の希望を優先してくれた。夏彦は、直接言葉にはしなかったが、真一には感謝していた。

夏彦は、真一に、二つだけ聞きたいことがあった。ひとつは、なぜ再婚をしなかったのか。自分自身、子供心に母親が欲しいと思ったことがある。そんな子供に対して、母親の存在が必要だと、真一は考えなかったのか。それとも、亡くなった妻のことを思い続けて、再婚はしなかったのか。

もうひとつは、父親としての考えだった。子供の存在を考えずに家には帰らず、研究に没頭した日々。真一は、世の中に功績ある研究をした。だが、それは、福岡真一という男にとって、本当に大事なことだったのか。結婚をして子供を持った男して、家庭というものを放棄までして、やり続けるほど価値があった研究なのか。今となっては、わからないままだった。

祭壇にある、真一の写真を見る。

真一は、学者の顔つきだった。

ピンホーンと、玄関の呼び出しが鳴った。

客人が来たらしい。夏彦が玄関まで出向く

「福岡教授のお宅でしょうか？」

玄関の取次ぎに、ひとりの年配の男が立っていた。

男は、秋田博満と名乗った。秋田は、五十代後半ぐらいで小柄だった。

秋田は、祭壇の前で正座をして、真一の写真に深く礼をして手を合わせた。

「お参りに来ていただきまして、ありがとうございます」

夏彦も正座をして、秋田に礼を言う。

「夏彦さん、ずいぶん立派になりましたね」

秋田は、懐かしそうな口ぶりをする。

夏彦には、秋田と会った記憶がない。

「こちらに記帳をお願いします」

夏彦は、名簿帳を差し出す。亜希子から、香典返しのお礼をすることもあるため、弔問客には、かならず名簿に記入してもらうことを言われていた。

秋田は、名簿帳にペンを走らせた。

「ありがとうございます。この住所は？」

夏彦が、英語で書かれた住所欄に目がゆく。

「今は、アメリカのネバダ州に住んでいます」

「では、父が、イギリスで生活していた頃からの友人でしょうか？」

秋田が答えたことに、夏彦は推測するように尋ねた。

「いえ、友人と言うよりは、イギリスで福岡教授の助手をしていました。教授が日本に帰った後は、僕が研究を引き継ぎ、そのままイギリスに住みつくことになり、今は、アメリカの大学に勤めています」

秋田は謙遜ぎみに話した。

「では、わざわざアメリカから？」

「福岡教授が亡くなったと聞いて、すぐに日本に行こうと思いました。僕は、心から福岡教授を尊敬しています。教授から受けた恩義は忘れません。僕は今でも、教授を師と思っています」

秋田は、祭壇にある真一の写真を見て、熱弁するように言った。

「ありがとうございます。そのようなことを言っただくと、父も喜んでくれると思います」

夏彦が、再び秋田に礼をした。

「ところで、つかぬことをお伺いしますが、教授の遺品の中に、イギリスで撮影した写真が、ありませんでしたか？」

秋田が気になる様子で尋ねた。

「イギリス時代の写真・・・・・・・・？」

夏彦が首を傾げた。

「教授が白衣姿で、赤ん坊だった夏彦さんと、一緒に写っているものです」

「僕と、ですか・・・・・・・・？ 申し訳ありません。父が、亡くなったのが突然だったものですから、遺品まで整理がついてない状況です。でも、どうして写真を？」

「実は、私も、アメリカの大学で教授の仕事をしています。福岡教授と同じ研究をしまして、学会から、それなりの評価を受けました。それで、その研究を著書にしようと思っています。今、そのための資料を集めています。どうしても、研究員時代の頃にお世話になった、教授のことを書くつもりです。どうしても、その頃の写真が欲しいです」

「それでは、その写真を本に載せるために？」

夏彦が尋ね返す。

「ええ、どうしても必要なものです。写真の貸し出しと、使用の許可をいただきと思っています」

秋田は、必要というのを強調するように頼んだ。

夏彦は一瞬考えて、「わかりました。探してみます」

夏彦は、有名人の真一ならともかく、自分まで著書に載るのは、少し恥ずかしく抵抗があった。だが、赤ん坊だった頃の写真など、はっきりわかることはないだろう。また、遠くから訪ねてきた、秋田に断るのも悪い気がした。そのため許可することにした。

夏彦は、秋田の滞在先のホテルを教えてもらい、写真が見つければ連絡することを約束した。

玄関先にタクシーが着いた。後部座席のドアが開いて、秋田が乗り込む。

「わざわざ、ありがとうございました」

夏彦が礼を言う。

秋田は、夏彦に会釈する。

ドアは閉まり、タクシーが動き始めた。すると、正面から、買い物袋を手にした亜希子が現れた。秋田が、車窓から亜希子の姿を目で追いすれ違う。すると、秋田はすぐに振り返る。亜希子の顔が、どこか印象的に見えた。

次の日。

夏彦は、真一の書斎で遺品の整理をした。十畳ほどのスペースの壁一面の棚には、ぎっしりと本が並べてある。机の上には、分厚い本が積み上げられていた。床には 資料と思われるものが散乱してあり、足の踏み場もないほどの状態だった。

真一は、研究に没頭すると、資料や本を見ては、そのままにして片づけることをしない性格だった。真一は、亡くなる寸前まで、何か調べごとをしていたことが想像できた。

夏彦は、秋田から言われている写真を探すことにした。アルバムの中にあることは想像できたが、それを探しあてるのは大変な作業だった。

「見つかった？」

盆にウーロン茶を入れたグラスを持って、亜希子が書斎に入ってきた。

「いや、さっぱりだよ。どこに何があるのか見当もつかない」

夏彦は、手にした本を棚に戻しながら言った。

「どうぞ」

亜希子が、盆ごと机に置いてウーロン茶を勧めた。

「ありがとう」

真一は、机の椅子に腰掛けてウーロン茶を口にした。

「私も手伝うわ。探している写真っていうのは、どんなものなの？」

亜希子が、写真のことをくわしく尋ねた。

「親父が、イギリスの大学にいた頃で、白衣姿で赤ちゃんだった自分と、一緒に写っているものらしい」

「そう・・・・・・・・それだったら、三十年も前のものね」

亜希子が、ダンボール箱を開けて探し始めた。

夏彦のスマートフォンが鳴った。相手は秋田からだった。

「はい……今、写真を探しているところですが、見つけだせなくて……」

夏彦は、電話に出るなり、真っ先に写真のことを告げた。

「そうですか。それよりも、今夜お会いできませんか？ いや、どうしても会って、お話ししなければいけないことがあります」

秋田は、写真のことなど気にも留めず、夏彦と会うことを願うような言い方をする。

「申し訳ありません。今夜は予定がありまして」

今夜、亜希子と外で食事をする予定があった。

「夏彦さん、あなたの出生のことに関わる大事なことです」

「えっ！？」

夏彦は、秋田が切羽詰まっている様子で、急に自分の出生のことを口にしたことが理解できなかった。

「申し訳ない。今いる場所を出なければいけません。また後で連絡します。でも、これだけは事実です。あなたには、同じ年齢の弟がいます。そのことをお話ししたいのです」

急に秋田は、慌ただしく急ぐような言い方をした。

「それは、どういうことですか？」

夏彦は、耳を疑うように尋ね返した。

「とにかく、今夜会ってほしい。また後で連絡します」

そう言って、秋田は一方的に電話を切った。

夏彦は、いきなりのことで、スマートフォンを耳にあてたまま困惑していた。

「どうしたの？」

亜希子は、明らかに夏彦の様子が違うのを感じて、気にかけるように尋ねた。

「ああ……」

亜希子の声かけに、夏彦は我に戻った。

「今、秋田さんから変なこと言われた」

夏彦は半信半疑で、亜希子に電話の内容を告げた。

その日の夕方。

夏彦は、祭壇の前に座りこんでいた。

「電話入れたわよ」

亜希子が、予約していたレストランを、キャンセルしたことを伝えた。

「ごめん。自分から誘っておいて断ることになって……………」

夏彦が、すまなそうな表情で言う。

「私のことはいいけど……………その話は本当のことなの、あなたに弟がいるというのは？」

亜希子は、半信半疑で尋ねた。

「正直なところ、よくわからない。けど、秋田さんは、アメリカの有名大学の教授だ。そんな人が冗談で言っているとは思わない」

「秋田さんっていう方、本当にアメリカで大学教授をやっているの？」

亜希子は、秋田のことを疑っていた。

「自分も、秋田さんのことを調べた。そうしたら、ちゃんと大学の教授であることがわかったよ」

夏彦は、スマートフォンで、秋田がいる大学のホームページを開いた。教授の紹介欄に秋田の写真があった。学会で賞を貰っていることも英語で書いてあった。

「本当に大学の先生なのね」

亜希子は、夏彦から渡されたスマートフォンを見て信用した。

「とにかく、秋田さんと会って話を聞いてみよう。弟のことも気になるから……………」

夏彦は、心に決めたような言い方をした。

「でも、大丈夫なの？ お父様が亡くなってから、そんな話がでるなんて、何だか少し怖い気もする」

亜希子は不安げみだった。

「正直なところ、急なことで自分でも、どうしたらいいのかわからない。ただ……」
夏彦は、一瞬言葉を切って、黙って何かを考えた後、口を開いた。

「親父は、自分が生まれた時のことや、イギリスでの生活のことを話すことをしなかった。自分から聞いたこともあったが、いつも、はぐらかされて話そうとはしなかった。ひよっとしたら、何か特別な秘密があるような気もする」

夏彦は、以前から真一に対して、心にあったものを確かめてみたい気持ちがあった。

「それが、弟さんがいることなの？」

亜希子は、夏彦の気持ちを察するように尋ねた。

「弟がいることが本当ならば、どうして親父は、そんな大事なことを話そうとはしなかったのか。自分の身内になる人間のことを……とにかく、その真相は、秋田さんしか知らないことだ」

夏彦は、不思議なぐらいに落ち着いていた。秋田から弟がいることを聞いた時、唐突で驚きを隠せなかった。だが、少し時間が経つにつれ冷静になれた。父親である真一のことは、子供である夏彦にも、理解できない考え方や行動があった。その原因は、自分が、生まれた時から始まったことではないかと、弟の存在を聞いた時に直感した。

自分の人生に大きく関わることなら、確認しなければならない。その気持ちは強かった。夏彦は、祭壇の中にある、真一の写真を見つめた。

次の日の朝。

午前4時30分。外は薄暗い。夏彦はワイシャツ姿で食卓にいた。

実家から、勤め先のある東京の会社までは、通勤には時間的な不便さがある。そのため、早い時間に起きる必要があった。

パジャマ姿の亜希子が、夏彦の前に、ホットコーヒーの入ったカップを置いた。夏彦がカップを手にした時、大きな欠伸（あくび）をする。昨夜は遅くまで、秋田の電話を待っていたが、結局連絡がないままだった。

「何時まで起きていたの？」

「確か、1時過ぎまでは起きていたけど、ついウトウトしてしまって、そのまま寝てしまったよ」

夏彦は、真一の書斎で写真を探しながら、秋田からの電話を待っていた。

「でも、結局のところ電話はなかったのね……まったく迷惑なことね」

「何か急な用事があったのかな？」

夏彦が首を傾げた。

「秋田っていう人、あなたのことをからかったんじゃない」

亜希子は腹ただしく言う。

亜希子の怒る気持ちもわからなくもない。ここ数日間、嫁である亜希子には、家のことで忙しくしていた。やっと、ひと安心したところに、新たな問題事が起きた。亜希子自身も疲れていることを、夏彦は感じていた。

「亜希子、すまない。やはり、秋田さんが言ったことが、どうしても気になるんだ。今日仕事が終わったら、秋田さんの宿泊先を訪ねてみようと思う」

夏彦は、亜希子に気を使いながらも、自分に気持ちを伝えた。

「あなた！」

朝食を終えて、夏彦は家を出ようとする時、玄関先で亜希子が引き止めるように声を出した。

「どうした？」

「今、ニュースで、秋田さんが亡くなったみたい！」

亜希子の言葉に、夏彦は目を丸くする。

真一が亡くなる三日前。

真一は、朝から寝込んでいた。窓際にベッドがあって、外の雨音が強く聞こえてくる。

「お父さん、大丈夫ですか？」

亜希子が、真一に声をかけた。

「ああ」

真一が、パチリと目を開けて答える。

「お茶をお持ちしました」

「ありがとう」

真一は、ベッドから体を起こす。

「どうぞ」

亜希子は、緑茶の入った湯呑を真一に渡す。

真一は、緑茶をひと口すする。

「うん・・・・・・・・美味しい」

真一は、緑茶を味わうように飲んだ。

「亜希子さん、いろいろ世話をかけて、すまないね」

今日は、家政婦の宮崎が休んでいる。そのため、亜希子が真一の世話をしてもらっている。

「お父さん、気になさらないで下さい。私は嫁ですから、遠慮せずに何でも言って下さい」

「ありがとう・・・・・・・・それにしても、夏彦は幸せ者だな。こんなに素敵なお嫁さんをもら
って」

真一は、笑顔で感心するように言う。

「お父さん、からかわないで下さい」

亜希子が照れる。

「からかうわけじゃないよ・・・・・・・・本当にありがとう」

真一は、本心で亜希子に感謝していた。真一は、亜希子がいると、どこか気が安らぐ。

「今度は、お昼をお持ちします。ご飯はお粥でいいですか？」

「ああ、頼むよ。じゃ、もう少し休むよ」

再び、真一が布団に入ろうとした時だった。ブーンと、音が響いた。それは、ベッド横のスマー
ルテーブルから聞こえてくる。

「お父さん電話ですね。取りましようか？」

その音が携帯電話だと、すぐに亜希子はわかった。

「ああ」

真一が返事をする。

亜希子は携帯電話を取り、寝たままの真一に手渡す。番号が表示されているが、身に覚えがない。そのため、真一は電話には出なかった。。

「知らない相手かもしれないからね・・・・・・・・」

真一が説明するように言うと、携帯電話の鳴る音が止まった。

「ひよっとしたら、お父さんのお知り合いの方かもしれませんよ。私も、携帯電話の機種を買い替えた時、友人に電話したんですけど、電話番号を変えていたので、すぐには出てもらえなかったことがありました」

「そう・・・・・・・・」

「今度、それと同じ番号が掛かってきたら、電話に出てみては、どうですか？ 案外懐かしい人だったり、するかもしれませんよ」

「そういうことも、あるかもしれないね」

亜希子の経験談を聞き入れて、真一は、携帯電話を枕元に置いた。

真一はベッドで寝入る。そっと、亜希子は部屋を出て行く。

しばらくして、再び携帯電話が鳴った。真一が目を開ける。今度は、迷わず携帯電話に出ることにした。

「はい・・・・・・・・私だが・・・・・・・・えっ！？」

真一は、思わず体を起こした。

② 手紙

夏彦は、駅のホームに立って電車を待つ間、スマートフォンでネットニュースを見た。今朝方、秋田博満は平塚市の車道で、ひき逃げにあって死亡。警察が捜査していると書かれてあった。

電車がホームに入ってきた。

秋田の突然の死は、あまりに不思議なことで、キツネにつままれたような出来事である。亜希子是不気味で怖がっていた。

『はじめから、弟なんていなかったのよ』と、家を出る時に、亜希子が言ったことが、夏彦の心を揺さぶる。

正直、夏彦は、弟の存在は気になって仕方がない。事実なのか知りたい気持ちはあったが、秋田が亡くなったことで、真実はわからなくなった。亜希子には、余計な心配をさせてしまうことを思えば、これで良かったのかもしれない。

『弟なんかいない・・・・・・・・』

そう思うほうがいい。

夏彦は、自分に言い聞かせて、電車に乗り込んだ。

夏彦が出勤すると、デスクの横に大きなダンボール箱が置いてあった。その中には、香典返しの品が入ってある。真一の会社関係で、葬儀には参列はせずに、香典だけを渡した者がいる。夏彦は、香典返しの品が入った紙袋を手にして、会社内を回った。それは、かなりの時間を要した。

夏彦がデスクに戻って来ると、事務員が山積みにして、書類と郵便物を持ってきた。一週間分の仕事が溜まっていた。

早速、夏彦は郵便物から手を付けた。封筒を開けて文章に目を通す。それを機械的に繰り返す。ふと、手にしたものに目が留まる。差出人は、『秋田博満』と書いてあった。

夏彦は、封筒を机の上に置いて、背もたれ椅子に寄りかかり考えた。

今朝方、亡くなった人間から手紙が届くなんて、奇妙で不気味にも思えた。だが、その手紙には、亡くなった秋田が、自分に何かを伝えたい思いみたいなものを感じる。そう思って、再び封筒を手にした時、亜希子の不安そうな表情が浮かんだ。亜希子には悪いと思いながら、手紙を取り出した。

『夏彦さん。あなたが、この手紙を読んでいる時、私は、どうなっているのかわかりません。どうしても、話しておきたいことがあります。あなたには、同じ年齢の弟がいます。彼の名前は、マック・ヤマグチといいます。機会があれば、会ってあげてほしい』

横書きの便箋に、パソコン文字で書かれていた。

夏彦は、手紙を読み終わると、迷うことなく、スマートフォンを取り出して、誰かに電話をする。

夜。

夏彦が行きつけのバーに入ってくるなり、店の奥に座っている男に目をやる。男は、ひとりでコーラを飲んでいた。

「待たせて悪い」

そう言って、夏彦は、テーブルを挟んで向かい合わせに座る。

夏彦は、バーテンダーにバーボンの水割りを注文した。

男の名は長野正平という。夏彦の高校生時代の後輩だった。二人とも、バスケットボール部の所属だった。今は警察庁に勤めている。

「何か困ったことでも？」

長野が、気になったことを真っ先に尋ねた。

「・・・・・・・・」

夏彦は、唐突なことで言葉が出なかった。

「僕は警察の人間です。その僕に、相談したいことがあるってということは、何か厄介なことじゃないかなと思ひまして」

長野は、夏彦から誘いの電話を受けた時から、思っていたことを口にした。それは凶星だった。

「.....実は、お前しか頼めないことなんだが」

夏彦は、少し間をおいて、ゆっくりと口を開いた。

「どんなことですか？」

「今朝方、平塚市でひき逃げで事故死した、秋田博満という男性のことなんだが」

「平塚市ですか？」

長野は、すぐに皮のビジネスバッグから、タブレットを取り出して調べ始めた。

「これだな」

長野は探しあてた。

「秋田博満、4月4日未明、泥酔状態で横断歩道を歩行中、車のひき逃げで死亡。このことが何か？」

「なぜ、ひき逃げをされたか、おまえに調べてもらいたい」

夏彦は強い思いで頼んだ。

「この秋田という人物は、先輩とは、どういう関係ですか？」

「親父の助手だった人物だ。亡くなる前の日に会うはずだった。だが、連絡もなく亡くなるなんて、おかしいんだよ」

夏彦は、何か疑わしいものがある言い方をする。

「おかしいと言われても、時々、ひき逃げ事件は起こります。泥酔状態で、事故死するケースもよくあることです。そんなに珍しいことでもありませんよ」

長野は反するように説明する。

「自分は、秋田教授の死には、何かあるじゃないかと思っている」

夏彦は、真顔で強い口調で言う。一瞬、思いもよらないことで、長野は後ずさるように口をつぐむ。

その時、バーテンダーが注文された水割りを、テーブルの上に置いて行く。

「先輩が、ひき逃げ事件に何か疑うものがあると思っても、それだけでは、警察は動きません。何か、物的な証拠みたいなものがないかぎり、警察としては、捜査できないんです」
長野は落ち着いた様子で、警察の人間らしく、きっぱりと言い切った。

「・・・・・・・・」

夏彦は、しばらく考えこんだ。長野には、隠し通すことができないことを悟る。そう思った時、上着の内ポケットから封筒を取り出した。

「これは、秋田教授から、自分宛に会社に届いたものだ」

夏彦が封筒を差し出す。

「読んでもいいんですか？」

長野の問い掛けに、夏彦は静かに頷いた。

長野が手紙を手にするのと、一瞬、目を見開くようにして読む。

「ここに書いてあることは、事実ですか？」

手紙を読み終わると、長野が確かめるように尋ねた。

「正直、自分もよくわからない。だが、秋田教授が、弟の存在を知らせに電話した時、どこか慌てていた様子だった。そして、その後に亡くなっている」

「秋田教授は、この手紙に書いてあることを、先輩に話すつもりだったんでしょうか？」

「そうかもしれない」

夏彦は、推測するように答えた。

「ここに書いてある、マック・ヤマグチという人物が、先輩の弟になるわけですか？」

「それもわからない。この手紙を読んで、初めて聞く名前だ」

夏彦は、首を傾げて答えた。

「確かに、何かに追われているような内容の手紙ですね。でも、先輩のお父さんが、他所で子供を作るような人物だと、僕は思えないんですが」

「人は、真面目な堅物な人間だと言っていたが、親父だって男だ」

夏彦は否定的に言う。その中に、父親への怒りのようなものがあるようだった。

長野は、それ以上反論することを辞めて、「わかりました。僕なりに調べてみます」

「悪いな、無理なこと……お前しか頼む相手がいないんだ」

夏彦が、すぎるように言い方をした。

「神奈川県警には、知り合いがいますから聞いてみます」

長野は、警察庁のキャリア組で、神奈川県警にも顔が利く。

「では、これで失礼します」

長野は用件だけ聞いて席を立つ。

「おい、もう帰るのか！？ ゆっくり飲もうじゃないか？」

夏彦が引き止める。

「せつかくですが、今から、職場に戻らないといけないものですから」

そう言って、長野は足早に店を出る。外でタクシーを拾い、警察庁に向かった。

夏彦は、会社の休み時間、外にあるベンチに腰掛けた。

長野から着信履歴の電話があった。秋田博満の死亡について、調べることを頼んで、三日後のことだった。

夏彦が電話を掛ける。

「僕だが……今、話せるか？」

「ちょっと待って下さい」と、長野は言って、喫煙室で吸いかけのタバコをもみ消して、人のいない廊下に出た。

「お待たせしました。神奈川県警で確認したことを報告します」

長野は、なるべく人に聞こえないように小さな声で言う。

「担当した警察関係者に尋ねたところ、事故死に間違いのないことです。秋田教授は、深夜3時30分頃、平塚市の中町三丁目の交差点で、車に跳ねられて死亡したとのこと。ひき逃げ事件ということで、今現在捜査中です。それから……ちょっと待って下さい」

長野の前を上司が通りかかった。長野は上司に一礼をする。上司の姿が廊下から見えなくなった後、再び電話口に出る。

「話を中断してしまって申し訳ありません。鑑識に確認したところ、秋田教授の体内には、多量のアルコール成分が含まれていたという結果です。そのため酔った状態で、車の前に飛び出てきた可能性があります」

長野は、調べたことを淡々と伝えた。

「飲酒した場所はわかるのか？」

夏彦が気になったことを尋ねた。

「宿泊先のホテルの部屋には、殻になったバーボンのボトルや、空いた缶ビールがありました。おそらく、そこで飲酒したようです」

「部屋には、秋田教授の他に誰かいたのか？」

「秋田教授以外には、人がいた形跡はなかったようです」

「それじゃ、それだけの酒を、秋田教授ひとりが飲んだということか。でも、自分が電話で話した時には、酔っていた様子ではなかった」

夏彦は、思い出すように言う。

「僕が調べたところでわかることは、そこまでです。それから、秋田教授の遺体は、昨日、実の妹さんが引き取られたようです」

「妹さんがいたのか？」

夏彦は興味深く聞き返した。すると、今夜、斎場で通夜をすることを知った。

斎場の建物の前にプリウスが停まった。助手席のドアが開いて、喪服姿の夏彦が降りてきた。

「駐車場で待っているわ」

亜希子が運転席から言う。

「わかった。すぐに戻る」

プリウスは、ゆっくり動きだして駐車場まで走行する。

夏彦は、半信半疑ではあったが、弟の存在は気になった。秋田自身は何か重大なことを、自分に話したい口ぶりの電話だった。そのことを阻むため、何か事件的なことに巻き込まれて、殺害されたのではないだろうか。

警察は、秋田の死について十分な捜査はしないだろう。ひき逃げ犯を捕まえても、殺害目的があったことまで、追及できないかもしれない。真相は謎のままである。夏彦は、自分が動いて真実を知るしかないと考えた。その思いで、秋田の通夜が行われた斎場へやってきた。

夏彦は、長野との電話を終えた後、すぐに亜希子に連絡をする。会社に喪服を持ってきてもらうことを頼んだ。秋田の通夜に行くことを告げると、亜希子は、言葉をつまらせて黙り込んだ。亜希子の気持ちはわかっていた。厄介なことに関わってほしくない。それでも、真実を知りたいという、自分の強い思いを告げて説得をした。

夏彦が会社帰りに、埼玉の斎場へ行って、鎌倉まで帰ってくるのは、時間的にも大変なため、亜希子が車を出すことを決めてくれた。

秋田は、埼玉市で生まれ育った。今でも実家があり、実の妹が暮らしている。秋田は離婚歴があり、アメリカでは独り身だった。そのため、秋田の遺体は妹が引き取った。夏彦が建物に入ると、女性スタッフが声を掛けてきた。スタッフから、葬儀が終わったことの説明を受けると、親族の控室へと案内される。

「どちら様でいらっしゃいますか？」

五十代ぐらいの、喪服姿の女性が迎えた。

「福岡といます」

「福岡さん……？」

女性は、どこか覚えがあるような言い方をした。そして、

「福岡教授の息子さんで、いらっしゃいますか？」

女性は尋ね返した。

「そうです」

「えっ!？」

夏彦の返事に、妹は少し動揺した様子だった。

「お参りさせていただきませんか？」

「どうぞ、お上がり下さい」

妹は、すぐに気を取り戻して、夏彦を祭壇へと案内する。

控室には、妹の他に年配の男性が一人いた。

夏彦は、祭壇に香典を置き線香を上げて、手を合わせた後、棺桶の中を覗きこんだ。

秋田は、安らかに眠っていた。

『いったい、何があって、こんなことに……』と、心の中で夏彦は無念さを感じた。その後、夏彦は、祭壇横で正座している妹の方に向き深く礼をした。

「ありがとうございます」

そう言って、妹は、小さなお盆に載せて湯呑を、夏彦の前に置いた。

「申しおくれました。わたくし、秋田の妹で真理といます。今は結婚して徳島の姓です」と、真理は自己紹介をして礼をした。

「どうぞ」

黒髪に白髪が混じった小柄な男性が、粗供養品が入った小さな紙袋を持って、夏彦の前に置く。その後、真理の横に正座をする。

「こちらは夫です」

真理の紹介で夫も、夏彦に礼をした。

真理とは面識がない夏彦は、一般的な自己紹介のような話しかけできなかった。秋田の死に、何か特別なことを知っていないかと尋ねようと思った。だが、本人の遺体を目の前にすると、どこか

聞きづらいものがある。

そんな時、「兄も私も、お父様には感謝しています」と、真理から、思いもよらないことを言われた。

「私達の両親は、兄が大学在学中に交通事故で亡くなりました。その当時、私は高校生でした。家は、裕福ではなかったため、兄は、私を養うため大学を辞めて、働こうと思っていた時です。福岡教授が、兄の学費や、私達の生活の工面をしていただきました。おかげで、兄は大学を卒業できました。私も何とか一人前になりました。本当にありがとうございました」

真理は、息子の夏彦に、真一の面影を重ねるようにして、感謝の言葉を述べているようだった。夏彦は、真理の話聞いて、真一が人の世話をしていたことが意外だった。

「ところで、つかぬことを伺いますが、兄は、福岡教授の葬儀には、出席されたんでしょうか？」

「僕が、秋田教授と会ったのは、父の火葬を終えた後です。その時、葬儀には出席していませんと言っていました」

どうして、そんなことを聞くのだろうと、夏彦は思った。

「そうですか・・・兄は、最後まで、福岡教授に会うことはできなかったんですね。後悔をしたまま亡くなったんですね・・・」

真理は、しみじみと言う。

「後悔というのは、どういうことでしょうか？」

夏彦は、気になるように尋ねた。

「兄は、日本に帰ってくるたびに、福岡教授の所を訪ねていました。でも、会ってもらえなかったようです。そのたびに、取り返しのつかないことをしてしまった。福岡教授には、誤っても、許してもらえないことをしてしまったと、愚痴のように言って、悔やんでいました」

「取り返しのつかないこととは！？」

夏彦は、前のめりになって尋ねた。

「それは、私にもわかりません。でも、兄と福岡教授との間には、何か重大な秘密を持っていたようでした」

真理の言ったことに、夏彦は確信したのを感じた。

「どうだった、何かわかった？」

夏彦がプリウスのドアを開けると、運転席から亜希子が、待ち受ける様子で尋ねた。

「いや、秋田教授の死については、何もわからなかった。でも、親父と秋田教授との間には、イギリスでの事が、何か大きく関係しているようだ」

夏彦は、助手席に座るなり思ったことを言った。

「ねえ、それで、どうするの？」

亜希子が気にかける。

「とりあえず、出してくれ」

夏彦は、心当たりのある人物を思い出していた。

プリウスは斎場を出てゆく。

③ 車窓

長野が、管理官室の扉をロックする。

長野は、警察庁に出勤するなり、福島管理官に呼び出される。

「失礼します」

長野は扉を開けて、福島が座っている机の前に立った。

「長野警視、二日前、神奈川県警まで行って、事故死した人間の何を調べていた？」

福島は、怒りを隠すようにするも鋭い目つきで尋ねた。

「事故死した人間には、いくつか不明なところがありました」

長野は、管理官が、ひき逃げ事件のことを知っていることに内心驚いたが、表情は変えずに答えた。

「不明なところというのは、どういうことだ？」

福島は眉をひそめた。

「事故死ではない、という通報がありました」

「通報したのは、誰だ？」

福島が厳しい表情で尋ねる。

「ある善良な一般市民です」

長野は、堂々した答え方をする。

「善良な一般市民……」

福島は、グッと怒りを抑えて吐き出すように、「それで何かわかったのか？」と、尋ね返した。

「いえ、何も」

「そうか。それだったら、これ以上は余計なことに手を出すな」

福島は命令口調だった。

「余計なこととは、どういうことですか？」

長野は、神奈川県警に事故死した内容を聞いただけなのに、福島の怒りの態度が理解できなかった。

「他所の事件よりも、本来の生活安全局の仕事をしろということだ。おまえはキャリア組だ。もっと上を目指す人間だ。つまらんことに首を出して、キャリアにキズをつけることにもなりえるぞ」

福島は、忠告するというより、どこか脅すような言い方をした。

福島は、長野が管理官室を出た後、すぐにスマートフォンを取り出して、誰かに電話をする。

「福島です。指示どおり、長野には、余計なことをするなど釘を刺しておきました。ところで、

いつまでアメリカの客人は、いらっしゃるんでしょうか？ 早く帰っていただかないと、こちらとしても、厄介なことになるかもしれません」

福島は、不安まじりに電話の相手に尋ねる。

「そうですか・・・・・・・・それで、本当にマック・ヤマグチという人物は、この日本に来ているんでしょうか？」

福島は、苛立って念を押すように尋ねた。

「わかりました」

福島は、しぶしぶ返事をして電話を切った。

長野は、ひとり喫煙室にいた。煙草の煙を一気に吐き出す。正直、福島から言われたことが納得できなかった。先日調べたことが、すぐに上司の耳に入っている。秋田の事故死を調べただけなのに、関わることをやめるように強く言われた。何かある。秋田の死に疑わしいものを感じた。

「白樺台方面に行ってください」

夏彦は、軽井沢駅に着いて、すぐにタクシーに乗り込んだ。雲ひとつない晴れた午後だった。車道を挟んで店が立ち並んでいる。近くにアウトレットモールができて、休日でもないのに、観光客が詰めかけて活気があった。

軽井沢には、夏彦の知り合いがいる。真一が、イギリスにいた頃のことを知っている人物だった。

タクシーは、人通りのある道からバイパスを走っていた。

「お客さん、もうすぐ白樺台です。どちらまで行かれますか？」

運転手が目的地を尋ねた。

「香川さんの別荘です」

「香川さんですね」

運転手は、すぐにわかった様子で、目の前の信号から右折する。

タクシーは、静かな林道に入ると、ブルーの外観のカントリーハウスの前に停まった。

「夏彦さん、ごめんなさいね。もうすぐ、主人は帰ってきますから」

夏彦が別荘を訪ねると、夫人が出迎えた。夫人は、還暦を過ぎているが、とても若々しく上品だった。

香川は外出中だった。夏彦は、香川の帰りを待つことにした。暖炉がある居間へ案内されて、厚い皮のソファに座った。

「どうぞ」

夫人は、テーブルの上に紅茶の入ったカップを置いた。

「いただきます」

夏彦は紅茶をすする。

「このたびは、お父様が、亡くなられて寂しくなられましたね」

夫人は、真一の死を惜しむように言う。

「主人も、真一さんが亡くなられて、とても寂しそうにしています。真一さんは、主人にとっては、弟のように接していましたからね」

夫人は、懐かしそうな顔をする。

外で車のエンジン音が響いて停まった。

「どうやら、帰ってきたみたいね」

夫人は、香川が帰宅したためキッチンへ行く。

「待たせて悪かったね！」

香川は、汗をかいて居間に入ってきた。

香川はテーブルを挟んで、夏彦の向かい合わせのソファに座った。

夫人が、アイステイーの入ったグラスを持ってくる。

香川は、アイステイーを一気に飲んだ。

香川は、真一にとっては恩師だった。イギリスの大学で、研究員になることを推薦した人物だった。七十歳を過ぎているが、今でも現役で臨時講師をやっている。今日も午前中、地元の大学で講義をして帰ってきた。

香川は、真一との思い出話を始めた。すると、一方的に話は止まらず、次から次へとエピソードが出てくる。夏彦は、なかなか本題へ移れず聞き入るしかなかった。

「夏彦さんは、あなたに何か聞きたいことがあるのよ」

見るに見かねた夫人が、香川の話のを止めた。

「そうだったね……つい話こんでしまって、すまん。聞きたいこととは、何かね？」

香川は、反省するように言って尋ねた。

「父のことですが……」

「真一君のことかね？」

「父はイギリスで、一体何をやっていたんでしょうか？」

香川は、夏彦の問い掛けに、一瞬黙り込んで考えた。不可解なことを聞くと思いながらも、ゆっくりとした口調で話始めた。

「福岡君は、イギリスで、人間臓器の遺伝子学の研究をしていた。そこで、臓器の再生医療の治療方法を見つけ出した。日本に帰ってから、それを証明するように、大学で研究の成果をあげた。そのことは、君も知っていることだろう」

「そのこと以外で、何かありませんか？」

夏彦は、真一の別の一面のことを知りたかった。

「それ以外とは、どういうことかね？」

香川は、げげんな顔で尋ね返した。

「実は、父の助手をしていました、秋田教授から連絡がありました」

「秋田君が？」

香川は、秋田のことを知っている様子だった。

「僕に、弟がいると言われていました。話を聞くために、会う約束をした夜に、事故死しました」

「えっ！ 秋田君が亡くなった……」

香川は、秋田の死を初めて知ったようで、目を丸くして驚いた後、しばらく考えるように黙り込んだ。そして、静かに話始めた。

「僕は、君以外に子供がいるなんて、真一君からは聞いていない。それに、秋田君のことを信用しないほうがいい」

香川は、きっぱり言い切った。

「亡くなった人間のことを、悪くいうのは気がひけるがね。彼は、昔から野心家だった。正直、人のために研究をするような人間ではなかった。私は、彼を福岡君の助手として、イギリスに連れてゆくことを、強く反対したんだがね」

香川は、反省するような言い方をする。

「福岡君も、彼が、信用できる人間じゃないことに気付いたんだらう。彼が帰国して、日本の大学に戻りたいと言ってきたが、福岡君は強く拒んでいたよ」

「そんなことがあったんですか」

夏彦は、真一と秋田の関係性を聞かされて、ちょっとびっくりする。

「正直、福岡君に隠し子がいるなんて、私は信じない。秋田君が言っていることを、真に受けるなんて、バカげているよ」

香川は、笑いながら否定的に結論づけた。

夏彦は、東京行きの新幹線に乗り込んでいた。高崎駅を過ぎた頃、車窓から夕陽が見えてきた。結局、香川からは、弟の存在などは覚えがないと言われた。考えてみれば、親しい関係であっても、真一と香川は他人である。他人である人間に、自分に隠し子がいるようなことを話すことはないだろう。真相は、遠いものになったと思った時だった。スマートフォンの着信音が鳴った。見慣れない電話番号である。

夏彦は座席を離れて、デッキへ向かい電話に出た。

「夏彦さん」

声のトーンで香川夫人だと、すぐにわかった。

「はい」

「あの……実は……」

夫人は、電話の向こうで、どこか遠慮がちに言葉を発するように思えた。

「あなたが、主人に弟さんの存在を聞かれていた時、そばで立ち聞きしていたの。話そうか、どうか迷ったんだけど……やはり、夏彦さんには、話しておくべきだと思って電話したの」

夫人は、思い切った様子で言う。

「私、美恵子さんが亡くなる前に、病院へお見舞いに行った時に……」

夫人は、夏彦の母親のことを口にした。

「美恵子さん、私の顔を見るなり言ったの」

「何を言われたんですか？」

夏彦は興味深く尋ねた。

「あの人は、恐ろしいものを作ってしまったと……」

「あの人って、父のことですか？」

「たぶん、そうじゃないかしらん」

「父は、何を作ったんですか？」

「美恵子さん、はっきりとしたことは言わなかったわ。でも、すごく悲痛な表情だったのは覚えているわ。それで、意識を失う前に言ったの。レプリカって」

夫人は、レプリカという言葉強調しているようだった。

「レプリカ……！？ それは一体何のことですか？」

「私にも、それは、よくわからないわ。でも、秋田さんっていう方が亡くなられたのも、そのことが、何か大きく関係しているんじゃないかしらん」

夫人は、心にあったものを、そのまま言ったように思えた。

「香川教授は、そのことをご存じなんでしょうか？」

「主人に、その話をしても、病状が悪化している時は、妄想みたいなことを言うことがあると言って、受け付けてくれなかったわ……あの時、もう少し、美恵子さんの話を聞いていたら、今頃になって、あなたが悩むような、心配事にはならなかったのに」

夫人は、痛々しいように言う。それは、心残りみたいなものを持って、後悔している様子だった。

電話を終えると、デッキの車窓から夕陽が射し込んでくる。

夏彦は、レプリカという言葉に、何か秘められたものがあるような気がして、心に強く留まった。

④ 雨宿り

現場百遍という言葉がある。捜査員が、何度も事件現場に出向き、小さな証拠を探し出すことで、事件解決につながることもある。長野もそれと同じ考えで、秋田が事故死した日の足取りを調べることにした。

上司から捜査を許されていないが、長野は単独で調べることにした。

秋田の死に何か疑わしいものがある。夏彦のためにも、それを追及してみたい気持ちがあった。

長野は、秋田が宿泊していたホテルへ出向いた。長野は警察の人間でも、現場に出向いて捜査をすることはない。どちらかという、捜査員を使う立場の人間だった。久しぶりの捜査の聞きこみに、少し緊張していた。

ホテルは、海沿いの工場地帯付近にあった。

長野は、ホテルのエントランスに入ると、深々と敷き詰められた絨毯の上を歩いて、フロントのあるカウンターに向かった。

「いらっしゃいませ」

若い男性フロントマンが対応をする。

「警察のものです」

長野は緊張のため、少し声をうわずらせて警察手帳を出した。

「ここに宿泊していた、秋田満博という人物のことで聞きたいことがあります」

「少々お待ち下さい」と、フロントマンは内線電話で上司を呼び出した。

背の高い端正な顔つきの女性が現れた。彼女は、このホテルのチーフ・マネジャーだった。

「こちらのホテルに宿泊していました、秋田満博という人物のことをお聞きしたいんですが？」
長野は、彼女に秋田の写真を見せようとする。

「そちらは、アメリカからのお客様でした」

彼女は、写真を見ることもなく、すぐにわかったように言う。勤め先の宿泊客が事故死した。その客のことを知らないはずはなかった。

「お客様のことは、以前にも刑事さんから尋ねられて、お話いたしました」
彼女が、二度も警察の人間が訪ねて来たことが不思議に思えた。

「以前に来られた刑事さんとは、部署が違うものですから、もう一度ご協力をお願いします」
長野は、サラリと言い訳するように言って、「秋田さんは、ここに何日間滞在する、予定だったんですか？」

「確か一週間だったと思います」

「事故死した日は、宿泊して何日目だったんでしょうか？」

「三日目でした」

彼女は淡々と答えた。

長野は、秋田がホテルを出る時、何か変わったことはないかと尋ねた。

彼女は、一瞬考え込むも、これといって変わったようなことはないと答える。

「では、秋田さんはホテルを出る時、かなり飲酒をしていたそうですね。どれくらい、酔われていましたか？」

「えっ！ 酔っていた……？」

彼女は意外そうな顔つきをした。

「私が見るかぎりには、酔っていたとは思えません」

「酔っていなかった……それは本当のことですか？」

「確か、夕方の六時過ぎだったと思います。お客様は、私に外へ出て来ると言って、急いでホテルを出ていきました。その時、飲酒をしていたようには思えませんでした」

彼女は、その時のことを鮮明に覚えている様子で、はっきりと答えた。

「しかし、秋田さんの客室には、殻になったボトルや、空いた缶ビールがあつて、そこで飲酒したと報告されています」

「ええ、確かに私も客室を見ました。でも不思議です。亡くなる前の日まで、一度もお部屋で飲酒することなんかなかったのに、どうして、その日だけ飲酒したのかしらん？」

彼女は、不思議そうに首を傾げた後、「それから、お客様が出た後、ホテルの外で、両手で顔を押しえながら、ふさぎ込んでいる男性がいました」

彼女は、記憶を追うように付け加えて言う。

「それは、どんな男性ですか？」

「スーツ姿で、ガッチリとした体系の男性でした。何か顔にかけられたようでした。私は、ホテ

ルのロビーで、休まれることを勧めたんですが、何か急がれている様子で、その場を立ち去っていかれました」

長野は、その男も、秋田博満と何か関係があるのかもしれないと思い、警察手帳に男の特徴を書き留めた。

長野はホテルを出た。次に、秋田が事故死した現場に向かうことにした。ホテルの外に出ると、タクシーは出払ってしまっていた。長野は、タクシーが拾える車道まで歩くことにした。

神奈川県警の捜査記録と、彼女の証言にはズレがあった。彼女の言うことが事実ならば、秋田は、ホテルで飲酒をしていないことになる。つまり、捜査記録には嘘が書かれていることになる。なぜ、そんなことを……。

長野は車道のある歩道に出た。長野がタクシーを拾おうと車道沿いに立つと、白いスカイラインが横づけして停まった。そして、ゆっくりと助手席の車窓が降りた。

「乗れよ。今から、おまえが行きたい所に連れて行ってやるよ」

運転席から男が、長野に声を掛けた。

「山形!？」

長野はびっくりする。男は警察庁の山形達郎だった。

「おまえ、どうしてここに!？」

長野は困惑した。

「いいから、秋田博満が亡くなった現場だろう。つべこべ言わずに乗れよ」

山形は、少し苛立った様子だった。

長野は、言われるままに助手席に乗り込む。

スカイラインは、ゆっくりと走り出した。

「おまえ、何で秋田博満のことを調べている？」

山形は落ち着いた様子で尋ねるも、目つきは鋭かった。

「ある善良な一般市民から、通報を受けて調べている」

長野は、管理官の時と同じように堂々と答えた。

「善良な一般市民！」

山形は、はぐらかされるような言い方をされて、ムツとする。

「まあ、いい……」

山形は、投げやりな言い方をして黙り込んだ。

しばらく、二人には沈黙があった。

山形は、長野と同期だった。年齢も、同じ三十三歳でありキャリア組だった。長野は生活安全局、山形は警備局に配属された。

長野は考えこんでいた。なぜ、山形は秋田のことを知っているのか。そして、自分の行動を知っているように、タイミングよく現れたのか。もしかして、福島管理官の指示で、自分を見張るように言われたのか、長野は勘を働かせた。

「おまえは、何もわかっていないな……」

信号待ちになった時、山形がボソツと言う。

「こっちは、客人の警固で忙しいのに、何で、このタイミングでお前が出てくるんだ」

山形は嫌味ぽく言う。

「じゃ、おまえは何を知っているんだ？」

長野は、山形の態度に反論する。

「後で話す」

山形はそっけなく言った。

秋田が死亡した事故現場近くまで来た。現場は、平塚駅南口出口近くの車道だった。山形は、駅近くの立体駐車場に車を入れた。

「ここから歩いて、すぐだ」

そう言って、山形は車を降りた。それに続くようにして、長野も車から降りた。

「なぜ、秋田博満の死亡現場を知っている？」

長野は、山形の後ろ姿に問いかけた。

「とにかく、ついて来い。説明は後だ」

山形は、振り返ることなく言って歩き出す。

長野は言われるままに、山形の後ろをついて行く。

二人が立体駐車場の建物を出ると、すぐに県道608号線の横断歩道がある。山形が、信号待ちをしている人の輪から離れて立つ。その横に並ぶようにして長野が立つ。昼間の時間帯も駅周辺は、人や車で混雑している。空は厚い雲が拡がって灰色だった。遠くから雷の音が聞こえてくる。

信号が青になった。一斉に人が歩き出す。それに続くようにして、山形も歩き出した。長野はその後をついて行く。

山形は、横断歩道を渡ると、ビルが建ち並ぶ道に入ってゆく。その道を、車が県道からの抜け道のために走っている。二人は歩道沿いを歩いた。歩く先に信号が見えた。やがて、四つ角の通りに出た時、山形はピタリと足を止める。小さな雨粒が落ちてきた。

「ここが現場だ」

小さな交差点だった。信号機の押しボタンがある電柱下に、誰かが供えた花が置いてあった。駅から、そう遠くはない場所だった。小さなマンションが建ち並ぶ静かな通りだった。

「秋田博満は、4月9日の深夜3時30分頃、泥酔状態で交差点を渡ろうとして、車のひき逃げにあって死亡した」

長野は、山形の説明で秋田が歩いてきた方に目を向ける。

「目撃者はおらず、現在も捜査中だ……表向きは……」

「表向きって……！？」

長野は、山形が意味しげに付け加えた言葉に反応した。

「おまえは知らないだろうが、亡くなった秋田博満は、CIAの人間と関わりがある」

山形は一変して渋い表情をする。

「……！？」

山形の言葉が意外すぎて、長野は返す言葉が出なかった。

雨が大粒になり、たちまち激しい豪雨へ変わる。

二人は、雨を避けるように、軒下のある建物に走り込んだ。そこは、マンションの一階部分で駐車場スペースだった。

秋田は、C I Aの人間と関わりがある。何の目的があつて、夏彦に会いに来たのか。もしかすると、何かの事件に巻き込まれて、亡くなったのだろうか。長野は、濡れた髪をハンカチで拭き取りながら考えていた。

山形は、びしょ濡れになったまま黙り込んでいた。フーと息を吐いて、心を落ち着かせると、チラリと長野を見る。

「おまえが誰に頼まれて、この事件を調べているかはしらんが、これ以上、秋田博満に関わるのは止めろ。この事件は厄介すぎる」

長野は、思い切って警告する。

「止めろって……さっき言っていた、表向きの捜査っていうのは、どういうことなんだ？」

長野は、山形の意味ありげな言葉の内容を知りたかった

「……わかったよ。おまえには話しておくが、これは、あくまでも機密なことだからな」

山形は、仕方なく口を開き始める。

「今、C I A捜査官の警固に当たっている。警固といえば聞こえはいいが、世話係みたいなものだ。まったく、あいつら人使いが荒すぎる」

山形が愚痴るように言う。

「何で、C I Aの捜査官の警固に当たっているんだ？」

「そんなことはわからん。警視監じきじきに、C I A捜査官の警固を当たるように言われた」

「警視監じきじきに！？」

長野が不思議そうな顔をする。

「日本で人探しをするらしい。その手伝いをするのが、俺の任務だが、あいつら、俺のことを当てにしていない。ただの運転手係だ」

山形は、C I A捜査官から、小バカにされているようで腹正しく言う。

「その人探すと、秋田博満の死と関係があるのか？」

長野が興味深く尋ねる。

「よくわからないが、C I A捜査官の警固担当になった日、真っ先に秋田博満が亡くなった現場に連れて行った。その時、捜査官二人は、何やら話こんでいたよ」

「何を話していたんだ？」

「さあ……早口の英語でペラペラ喋るものだから、さっぱりだ。でも、ひとつだけ、面白いことがわかった」

「面白いことって！？」

「鑑識では、車のブレーキの跡が残っていなかったそうだ」

「ブレーキの跡がない・・・・・・・・と、いうことは？」

「そうだ。ひき逃げ犯は、初めから、秋田博満を殺害する目的だったようだ」
山形が渋い表情で推測する。

雨は、強く路面を叩きつけるように降り続ける。

「殺害目的があったなんて、捜査資料には書いてなかったぞ？」

長野は、確かめるように尋ね返した。

「おそらく、警察内の人間が指示したんだろう。そうじゃなきゃ、今頃は、殺人事件として、県警の捜査員も動いているはずだ。だが、そんな動きもない」

「どうして、そんなことを？」

「さあな・・・・・・・・俺が、捜査官の警固を任された時から、急に殺人事件としての捜査がなくなった。おそらく、あいつらが圧力をかけたんじゃないか」

「圧力をかけるって、何の目的があつて？」

「さあな・・・・・・・・人探しのために、秋田博満の死が面倒なことになるのか。いずれにしても、警察内のトップの人間を動かすぐらいだ。この事件には、何か裏がある」

「アメリカの捜査官が、日本で起きた殺人事件を、うやむやにしたということなのか!？」

長野は、納得いかない様子だった。

「俺だって警察の人間だ。人ひとり死んでいる。捜査出来ないのは悔しいよ。でも、これは厄介すぎる。下手すれば秘密をかぎまわる人間にも、危害が及ぶこともあるかもしれない」

山形は、怒りを押し殺すように言う。

「これ以上は、この事件にのめり込むのは止めろ。福島管理官も心配していたぞ」

山形は長野を説得するように、優しい口調になった。

「やはり、福島管理官だったんだな」

長野はわかっていた。自分を見張ることを命じたのは、管理官よりも、もっと上の人間であることも。

「なあ、教えてくれないか？」

長野が、もうひとつ気になったことを尋ねた。

「何だ？」

「CIA捜査官が探している、人物は誰なんだ？」

「あいつら、こっちの情報は、人を使ってでも強引に手に入れるのに、自分達の情報は秘密にしてしまう。まったく、たちの悪い客人だ」

山形は、人物の名前を知らないようだった。

「何か手がかりになるようなもの、見なかったのか？」

長野が、記憶を呼び戻すように言う。

「手がかりね・・・・・・・・あ、そうだ。テーブルの上に置いてあった、資料みたいなものを見た。英語で書いてあったから、どんな内容だったか、わからなかったが、名前が書いてあった。確か日本人名だったな」

山形が、記憶をたどり出すように言う。

「その名前は？」

「えーと、何だったかな・・・・・・・・アイルランドで傷害事件を起こした、逃亡犯だというこ

とは、わかっているんだが」

山形は、思い出そうと努力するも、名前が出てこない。すると、近くで雷が落ちた。地響きするほど強いものだった。

その瞬間、「確か、名前はマック・ヤマグチと書いてあった」

山形は、ひらめいたように名前を思い出した。

「マック・ヤマグチ・・・・・・・・」

長野は、その名前に覚えがある。どこで知りえたのか思い出せない。しばらく考え込んでいると、再び、地響きするほどの雷が落ちた時だった。長野は、ハツとして気付いた。

⑤ 決心

休日の日。

長野は、パジャマ姿でベッドに座り込み、スマートフォンを手にしていた。

電話の相手は、夏彦からだった。

昨夜は、ずいぶん飲みすぎて、まだ酒が残っていた。

「レプリカって、お母さんが、そう言ったんですか？」

長野は、頭を押さえながら尋ね返した。

「ああ、そうだ。レプリカとは、『複製品』とか、『模造品』とか、『復刻版』の意味があるが、学者の親父にとっては、何か医療的な意味があるかもしれない」

「そうですか……」

長野は、歯切れの悪い返事をする。

「自分で調べてわかったことは、それだけだ。そっちは、何か、わかったことはあるのか？」

「いえ……今のところは別に……」

長野は、言葉を濁す言い方をした。マック・ヤマグチが、秋田博満の事故死に関わっていることを言い出せなかった。

「何かわかったら、連絡してくれ」

「はい……」

長野は、うかない顔で返事をして電話を切った。

長野は、ここ数日間悩んでいた。

秋田のひき逃げ事件には、アメリカのCIAが動いている。理由はわからないが、警察の上層部の人間を、牛耳るほどの圧力をかけていることは間違いない。警察も権力でものを言うところだ。ひょっとすると、政治がらみの事件なのかもしれない。そんな大きな山を、自分ひとりでは解決できないことは、十分承知している。夏彦のためにも、真相を突き止めてみたい気持ちが残っている。だが、そのことで夏彦にも、何か危害が及ぶこともあるかもしれません。

長野の心には、モヤモヤしたものがあつた。自分の無力さに自信喪失ぎみになっていた。

ベッド横の目覚まし時計を見ると、デジタル文字で午前11時近くを示していた。

長野は大きな欠伸（あくび）をして、部屋のカーテンを開けると、強い日差しが入りこんでくる。顔を洗おうと部屋を出ようとする、ベッドの上でスマートフォンが鳴った。

「はい……えっ！」

長野が電話に出ると、急に顔が青ざめた。

兄から、母親が倒れたという電話だった。

長野は、久しぶりに実家に帰った。家は、父親の代からガラス工場を営んでいる。

父親は、すでに他界していて、今は兄夫婦が営んでいた。工場は実家と隣接していて、隣の建物から機械を動かす音が響いてくる。その音は、毎日生活している人間には気にならないが、たまに帰ってくる長野には、うるさく聞こえた。

「大げさだよ……帰ってくるなんて」と、少し腰が曲がった母親が、居間に座りこんだ息子にお茶を持って来て言う。

「倒れたって聞いたから」

母親は心臓に持病があった。

「大丈夫だよ。少し疲れただけだよ……でも、気を使わせてしまって、すまなかったね」

母親は、心配してくれる息子を嬉しく思うように笑みを見せた。

長野は、ひと口お茶をすすり、「兄さんから聞いたけど、まだ工場の仕事をしているんだって……もう辞めたらどうだい？」と、優しい口調で言う。

「工場の仕事は敏夫に任せているよ。でも、福岡教授がいた大学の研究所からの注文だけは、私がやりたいんだよ」

母親は真顔になった。

「おまえも知っているだろう。私達家族は、福岡教授には、返しきれないほどの恩があることが……研究所からの注文だけは、変なもの作れないからね」

「……」

長野は、母親の強い思いみたいなものを感じた。それに押されて、それ以上のことは言えなかった。

「夏彦さんとは、会っているのかい？」

母親が気にかける言い方をする。

「ああ、先日一緒に飲んだよ」

「そうかい……教授が亡くなってから、夏彦さんも、心細いこともあるかもしれないから、その時は、ちゃんと相談に乗ってやるんだよ」

「うん、わかっているよ。でも、先輩が、警察の人間の僕に頼るようなことはないだろう」

長野は嘘を隠すため、母親から視線をそらして、お茶をすする。

「それも、そうだね。夏彦さんが、警察にお世話になるようなことはないか」

母親も納得する。

「ところで、おまえの仕事のほうは、どうなんだい？」

母親は、息子のことを気にかけて。

「うん・・・・・・・・まあ、何とか・・・・・・・・」

長野は言葉を濁した。

「何かあったのかい？」

母親は、息子の浮かない表情を見て気になった。

「なあ、母さん・・・・・・・・」

長野は、少し迷っていたが、話すことを決めて重い口を開いた。

「ひょっとしたら、警察庁ではない部署に行くかもしれない」

「何か仕事で失敗でもしたのかい？」

「失敗なんてしていないさ・・・・・・・・でも、上の人間に反発するようなことがあってね」

「どんなこと？」

「ある事件の捜査のことだね。自分が、やろうとしていることが、上の人間から止められている。どうしたら、いいのか・・・・・・・・」

「おまえが、やろうとしていることは、誰か人のためになることなのかい？」

弱気なことを言っている息子に対して、母親が優しい口調で尋ねた。

「えっ・・・・・・・・！？」

母親の思いもよらない問い掛けに、長野は言葉が出なかった。

「亡くなったあの人が、よく言っていたわ。自分が作るガラスが、少しでも使ってくれる人の役に立つなら、働きがいがある。私もそんな、あの人のことが好きだった」

母親はしみじみと言う。

「私は、おまえが警察官だからといって、何も上に立つ人間にならなくてもいいと思っているよ。ただ、人のためになる、人の役に立つ警察官になってくれたら、私は、それでいいと思っているよ」

母親の言葉は、暖かさを感じさせる。そして、長野の心にあった、モヤモヤしたものを吹っ切らせてくれた。

「母さん、ありがとう。このお茶おいしいね」と、長野はお茶をすすった。

夏彦は、再び真一の書斎で、写真を探すことを始めた。真一がイギリスで、どんなことをしていたのか。母親が、亡くなる間際に言った『レプリカ』の意味。すべての謎を解く鍵は、その写真にあるように思えた。

夏彦が仕事から帰ると、早々と夕食を済ませて書斎へ入る。写真は、一冊の本の中に挟まれているかもしれない。本棚から本を取り出し、パラパラとめくる作業を繰り返す。しかし、気が遠くなりそうなほどの本の数がある。作業は時間を要した。今日で作業は三日目になるが、まだ全体の半分も終わっていなかった。

「宮崎さんが見えているわよ」

夏彦が書斎に入ると、すぐに亜希子が呼びに来た。

夏彦が祭壇のある部屋に来ると、真一の写真に手を合わせている宮崎がいた。

「長い間、いろいろお世話になりました」

宮崎は、お参りを終えると、三つ指を畳について夏彦に礼を言う。宮崎は、真一が亡くなったことで、住み込み家政婦の仕事を辞めることに決めた。宮崎は、故郷の大分に移り住むことを決めていた。

「明日、発とうと思います。今日しかご挨拶できないと思ひまして、こんな時間にお伺いしました」

宮崎は、夏彦が帰宅する時間を見計らって訪ねた。

「宮崎さんが辞めるなんて……」

お茶を持ってきた亜希子が、淋しそうな表情をする。

「今でも、私は思います。あの時、どうして旦那様から離れてしまったのか……」

宮崎は、真一が亡くなった日のことを後悔しているように言う。

「宮崎さん、自分を責めたりしないで……」

亜希子が気にかける。

「そうだよ。自分も亜希子も、宮崎さんには、長く親父の世話をしてもらって、すごく感謝しているんだから」

夏彦も宮崎を労う。

「ありがとうございます。ただ、どうしても旦那様が、亡くなった日のことが不思議に思えるんです」

「不思議に思う？」

夏彦が反応する。

「普段は、決して旦那様を一人にすることはなかったんです。私が家にいない時は、亜希子さんが、旦那様のお世話をしていただきました。旦那様も、誰か一人は、家にいて欲しいことを望んでいました。それなのに、どうして……」

「確かに、あの日お父様から、研究所に届けてほしい資料があるからって頼まれて、外に出たわ。郵送することを勧めたけど、どうしても直接渡して欲しいと頼まれたのよ」
亜希子が振り返るように言う。

「私が、旦那様のお世話をしていると、急に力餅（ちからもち）が食べたいと言って、買ってきて欲しいことを頼まれました」

「力餅家（チカラモチヤ）の？」

夏彦が確かめるように尋ねた。その店は、鎌倉では老舗の和菓子屋で、その力餅は、真一の好物だった。

「ええ、そうです。亜希子さんに、帰り際に買ってきてもらおうと連絡しようと思いました。でも、どうしても、今食べたいと頼むものですから。正直、無理を言う旦那様の姿、私は初めて見ました。何かあったのかと、一瞬思いもしましたが、結局買いに行くことにしました。それが、旦那様の最後の姿になるなんて……」

宮崎は、シクシク涙ぐみ始めた。

夏彦と亜希子は、宮崎をなだめた。

宮崎が帰った後、夏彦は書斎で写真を探し始めた。

「見つかりそう？」

パジャマ姿の亜希子が、気になった様子で書斎に入ってきた。

「ダメだ」

夏彦は、脚立に足を掛けて本を手にして答えた。

「もうおやすみになったら、明日も仕事でしょう」

亜希子は、夏彦の体を気遣う。

「ああ、もう少ししたら寝るよ」

夏彦は脚立から降りて、真一が使っていた、皮の椅子に疲れたように腰かけた。

「私も手伝うわ」

亜希子が気を使う。

「それじゃ、ここにある本を見てくれないか。見終わったら、その上に積み上げておいてくれ」

夏彦は目の前にあった、コーヒーテーブルの上に置かれた複数の本を指さし、見終えた本は、真一の机の上に置くことを指示した。

「わかった」と、亜希子は、分厚い辞書のような本を手にして、パラパラとめくり始めた。

夏彦がホッと息をつく。

亜希子は手際よく本をめくり終わる。そして、真一の机の上に置こうとしたが、一瞬手が止まった。

「ねえ、一番上に置いていいの？」

「置いてくれ」

真一の机の上は、卓上タイプの木製フレームの写真立てと、電気スタンドが置いてある以外は、本が山積み敷き詰められたように置かれている。今にでも、バランスを崩して倒れてしまうようだった。そんなことも気にしない様子で、夏彦は答えた。

亜希子は、そっと本を山積みの上に置いた。そして、次の本を手にした。

「なあ、親父が亡くなった日、何か変わったことがなかったのか？」

夏彦は、宮崎が言ったことが気になっていた。

「特別、何も変わったところはなかったと思うけど……」

亜希子は、本をパラパラとめくりながら答えた。

「でも、なんで急に力餅が食べたいと言い出して、家に一人になったんだ？ 病気になってからは、すっかり弱気になって、誰かが、そばにいないと安心できない親父だったのに……」

「お父様、もうそんなに長くは生きられないことを、悟っていたのかもしれないわね。それで、急に力餅を食べたくなつたんじゃないの」

亜希子が推測する。

「・・・・・・・・それもあるかもなあ」

夏彦は、真一が亡くなった日の行動をおかしくも思った。だが、今となっては、確かめることはできない。結局、亜希子の言うとおりにかもしれないと思うことにした。

「ここにあるものって、どうするつもり？」

亜希子が、真一の遺品になる本のことを気になるように尋ねた。

「正直なところ、ここにあるものが価値あるものなのか、さっぱりわからない。一度、大学の研究者の方に見てもらって、必要とあるものなら、渡そうと思っている。それで残ったものは、全部処分しようと思う。どうせ、自分が持っていたって、わからない本ばかりだ」

夏彦は、周りを見渡して苦笑いする。

「でも、ここで作業していて、わかったことがあるんだ」

「・・・・・・・・」

夏彦の意味ありげな言葉が、亜希子の手を止めた。

「ここで親父は、研究を根気良くしていたことが・・・・・・・・これだけの書物が、そのことを物語っているようだよ」

夏彦は、感心したように本を持った。

その時、「あっ！」と、亜希子は驚いて声をあげた。

突然、ガタガタと窓が揺れて、ガチャンと何かが割れる音がした。それと同時に、机に積み上げられた本が床に落ちた。

小さな地震だった。一週間前、神奈川県東部周辺で地震があった。ここ数日間、余震が続いている。

夏彦は、揺れが収まると、しゃがみ込んで、床に落ちたものを拾い始めた。

「割れ物があるみたいよ。気をつけて」

亜希子が、注意深く言うと書斎を出た。

夏彦は、散乱した本の中で、小さなガラスの破片を目にした。本の下に何か埋もれているようだった。そっと本を払い分けると、木製フレームの写真立ての裏が見えた。ガラスの破片は、写真立ての表の部分で、床に叩きつけられたことは想像できた。夏彦がフレームの表を見ると、中にひび割れたガラスの向こうで、若い頃の母親が写っていた。

「お母様の写真だったのね」

ほうきを手にした亜希子が、夏彦の後ろから覗き込んだ。

「お父様、この写真だけは、ずっと大事にしていたのね」

亜希子が感心する。

写真は、母親が結婚したばかりの頃に撮られたものらしく、少し色あせたカラー写真だった。

「どうして母さんは、親父みたいな男と結婚したんだろう……」

夏彦が、不思議そうに言うのも無理はなかった。息子から見ても、若い頃の母親は、目元がくつきりとして、鼻筋が通った色白な美人だった。正直、交際したいと申し込んでくる男性も、沢山いたはずだろう。でも、どうして、家庭も顧みないで研究に没頭するだけの、おもしろみのない男と結婚したんだろうか。写真を見ると、その疑問が湧いてくる。

「私は、お母様がお父様を、結婚相手に選んだことは、間違っただけだと思っただけよ。それは運命だったのよ」

突然、亜希子が結論付けるように言った。

夏彦が、その言葉に反応して亜希子の方を見た。

「だって、私も、あなたと結婚したのは、運命だと思っているわよ」

亜希子は、少し照れたように言った。

「そうか……」

亜希子の言葉に、夏彦も、なんとなくわかるような気がした。結局のところ、男女の関係は、理屈でわかるものではない。何か互いに魅かれあうものがあったのだろう。それが運命というのかもしれない。夏彦なりに結論付けして片づけを始めた。

「ねえ、それは捨てるの？」

亜希子は、夏彦が、手にした写真立ての木枠部分が、折れかかっているのを見る。写真立ては、かなり古いものだった。

「これと、同じサイズのものを買ってきてくれないか？」

亜希子に頼んで、夏彦が、フレーム裏の木品の下敷きを取り出すと、白い写真裏に文字が目に入った。

『親愛なる、我が息子』と、黒ペンで書いてあった。

それを見た夏彦は、写真を取り出すと、二枚重ねになっている。母親の写真の後ろに、もう一枚写真がある。上の写真を除けると、夏彦は目を見開いて見つめた。

「何かあったの？」

亜希子が、夏彦の表情を気になって写真を覗くように見る。

「ねえ、これって……ひょっとして」

亜希子が直感で言う。

「そうだな、間違いない」

夏彦も確信する。

写真は、白衣姿の真一が、赤ん坊を抱きかかえている写真だった。

真一は、年齢にして三十ぐらいの頃で、赤ん坊は夏彦自身だった。それは、秋田が探していたものに間違いないと思った。

この写真には、すべての謎を解く鍵がある。一体、どんな意味が隠されているのか、夏彦は、写真の中の真一を、じっと見入っていた。

「長野さん、お待たせして、ごめんなさい」

亜希子は、コーヒーカップを、リビングのテーブルに置いた。

「僕の方から、福岡先輩に用事があったものですから、急に押し掛けるようになって、申し訳ないです」

「あの人に、家に来ることを言われたんでしょう。無理を言って」

亜希子は、長野の気遣いを察して、すまなそうに言う。

「いえ、そんなことはありません。僕も、先輩の実家を訪ねてみたいと思っていました。よく学生時代は、こちらで先輩と一緒に、テレビゲームをして遊んでいましたから、懐かしい気がします」

長野は、本心からそう言った。

「温かいうちにどうぞ」

亜希子がコーヒーを勧めた。

「いただきます」

長野が、コーヒーカップに口をつけた。

「うん、美味しい。ずっと、このコーヒーを使っているんですね」

長野は、夏彦が結婚したばかりの頃、新居を訪ねたことがあった。その時に、亜希子が入れたコーヒーの味を忘れてはいなかった。それは、コーヒー好きな亜希子が、専門店で取り寄せている、ハワイ産コーヒーだった。

「先輩は幸せだな・・・・・・・・こんな、美味しいコーヒーを入れてくれる女性がいて」

長野は、羨ましいように言う。

「長野さんには、いいお相手はいないの？」

「えっ！？ いえ・・・・・・・・母親なんかは、早く結婚しろと言うんですけど・・・・・・・・なかなか出会いがなくて」

長野は、照れ笑いをして答えた。

「そう・・・・・・・・お母さんを安心させてあげるためにも、いい人が見つかるといいわね」

亜希子が、にこやかに言う。

「もう八年も経つんですね。先輩と亜希子さんが知り合ってから・・・・・・・・」

夏彦と亜希子は、コンパで知り合った。高校バスケット部の卒業生と、亜希子が在学していた、大学のサークルで飲み会があった。その時、長野も出席していた。その席で、夏彦と亜希子は、意気投合して、付き合うようになって結婚まで至った。

「あの時の亜希子さんは、先輩しか見ていなかったように思えたんです。ひよっとしたら、一目惚れしたのかなって・・・・・・・・」

「えっ！ 」

長野から唐突のことを言われて、亜希子は恥じらった。

「それで、そう思ったことを先輩に話したら・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

長野が言葉を切ったので、一瞬、亜希子も気になる。

「先輩も亜希子さんを見て、何か、ピンとくるものがあったと言っていました」

「へーえ。あの人、そんなことを・・・・・・・・」

亜希子は、感心した様子だった。

「先輩から、そのことは聞かされていなかったんですか？」

長野は意外そうに尋ねた。

「そうね・・・・・・・・そうだったわ」

亜希子が、思い出したように照れ笑いをして答えた。

ガラ〜んと、玄関先で音がした。

「帰ってきたみたい」

亜希子が、反応するように言った瞬間、「ただいま」と、夏彦が、急ぐようにしてリビングに入ってきた。

「待たせてすまない。こっちへ来てくれないか？ 」

夏彦はすぐに、長野を書斎へ案内した。

長野が書斎に入るなり、夏彦は、真一の机の引き出しから写真を取り出して、差し出すように見せた。

「これが、秋田教授が探していたものだと思う」

「・・・・・・・・」

長野は写真を手にすることなく、黙り込んで複雑な表情をする。

「先輩に、お聞きしたいんですが？」と、長野は思いがある尋ね方をした。

「何だ？」

夏彦は、長野のただならぬ気配を感じた。

「マック・ヤマグチの存在を知って、どうするつもりですか？」

「マック・ヤマグチは、存在する人物なのか！？」

夏彦は、反応するように興味深くなる。

「会うつもりですか？」

長野は、意味ありげな尋ね方をする。

「会いたいと思っている。彼の母親のことも知りたい」と、夏彦は静かに答えた。

「マック・ヤマグチは、かなりの危険人物だと思います。正直、これ以上は、弟の存在と思って、追及することを止めたほうがいいと、僕は思います」

長野は、心にあったものを思い切って言った。

「危険人物って、一体どういうことなんだ！？」

夏彦が怪訝な顔をする。

「僕なりに、マック・ヤマグチのことを調べてみました。ただ、調べて見ると、警察内の機密になっていて、調べることが出来ないんです」

「機密って・・・・・・・・！？」

「マック・ヤマグチは、アイルランドでは窃盗犯だったようです。日本に逃げ込んでも、日本の警察は、彼の身柄を拘束して、イギリスの捜査官に渡すことができます。ただ、彼の場合、日本の警察でも、手が出せない人物になっています」

「それは、どういうことだ？」

「僕にもわかりません。ただ、秋田博満の死とマック・ヤマグチとは、何かしら関係しているようです。その真相を解明しようとするのを、拒む組織があるようです。おそらく、日本の警察も牛じるほどの大きな組織が・・・・・・・・」

長野は言葉を切った後、夏彦の顔を見て厳しい表情をなす。

「先輩には、覚悟がありますか？」

「覚悟・・・・・・・・！？」

長野の押し迫るような尋ね方に、一瞬、夏彦は後ずさる。

「先輩が、秋田博満やマック・ヤマグチのことを知ろうと思えば、身の危険にさらされることも、あるかもしれません」

長野が、強く突き刺すような目つきで言った。

すると、扉の向こうで、ガチャンと物が壊れる音がした。

二人が扉の方に目を向ける。

亜希子が、盆から湯呑が床に落としていた。

「ごめんなさい。驚かせて……」

亜希子は、身を震わせながら割れた湯呑を拾おうとしていた。明らかに、動揺している様子だった。

その姿を見た夏彦は、どこか心苦しい思いになった。

次の日。

長野は、仕事を終えて警察庁内のエレベーター前にいた。エレベーターの扉が開いた。中に山形が、ドスンと立っていた。

「よお」

山形が無愛想に挨拶する。

「おう」

長野は低い声で挨拶して、山形の横に立つ。扉が閉まりエレベーターは降り始める。

「おまえ、まだ平塚のひき逃げ事件を調べているのか？」

山形が正面を向いたまま無表情で尋ねた。

「・・・・・・・・」

長野は何も答えなかった。それは調べているということを行っているのと同じだと、山形は思った。

「まったく、おまえって奴は・・・・・・・・」

山形が呆れ顔をする。

「おまえの方は、まだ客人の警固を続けているのか？」

長野も正面を向いたまま尋ねた。

「今、交代したところだ。今日もこき使われたよ・・・・・・・・まったく、早く帰ってもらいたいよ」

山形がぼやく。

「おまえ、まだ平塚の事件を調べているんだったら、どうしても、話したいことがある」

山形が意味しげに誘う。

「すまないが、今から約束があるんで、またにしてくれ」

「約束って、通報した善良な一般市民と？」

山形が推測して尋ねた。

“ピーン”と、音がして、エレベーターが停まった。

「誰だっていいだろう。おまえには関係ないことだ。お疲れ様」

長野は、どうせ事件の追及を止めることの話だと思って、あっさりと答えて、エレベーターを出た。

「まったく、人の気持ちを無視しやがって・・・・・・・・」

山形は、不機嫌そうにエレベーターを出た。

長野が居酒屋に入ると、夏彦は店の一番奥の席にいた。

「お待たせして申し訳ありません」

長野はテーブルを挟んで、夏彦と向かい合わせに座る。

「いや、こちらこそ。無理に誘ってしまって、遅くなると思ったから、先にやっていたよ」

夏彦は、テーブルの生ビールと枝豆に口をつけていた。

店員が、長野の注文した生ビールを持ってきた。

長野は、グツと一気に生ビールを飲んだ。ひと口飲み終わると、ジョッキの半分ほど無くなっていた。

「昨日は、急に帰らせてしまって、すまなかった」

夏彦は、顔を曇らせて謝る。

「いえ、そんな気を使わないで下さい。僕のことよりも、奥さんは大丈夫でしたか？」

長野は、心配そうに尋ねた。

昨夜、秋田の死亡事件を追及する人間には、命すら脅かす危険が及ぶことを、夏彦に話をしているのを、亜希子は立ち聞きしていた。その時の亜希子は、身震いが止まらないほどの、恐怖心に怯えていた。その姿を見た長野は、気が引けて話を途中で止めた。

「あれから、亜希子を落ち着かせるために、すぐに休ませた。そうしたら、今朝は何事もなかったように、笑顔で送り出してくれたよ」

「そうですか……」

長野は、ひと安心するも、夏彦の表情は曇ったままだった。そのことで亜希子は、どこか無理をしていることが想像できた。

「それでな……申し訳ない」

夏彦が気まずそうに謝る。

「……」

急なことで、長野が目を丸めた。

「実は、自分から頼んでおいて勝手だが、これ以上、弟の存在のことを調べるのは、やめようと思う」

夏彦が決心したように言う。

「……そうですか。でも、それでいいんですか？」

長野は、確かめるように尋ね返した。

「正直、弟の存在は、真実なのか確かめてみたい気持ちはある。でも、どうして、マック・ヤマグチは、日本に来ていて、自分に会おうとはしない。警察に追われているからっとはいえ、何かしら連絡する方法はあるはずだ」

夏彦は、吐き捨てるような言い方をする。

「真実を追求すればするほど、謎になってゆくばかりだ……でも、そのことよりも、大事にしなきゃいけないものが、あることに気付いたんだ」

「それは……垂希子さんのことですか？」

長野は、わかっているように尋ねた。

「昨夜の垂希子の姿を見たら、気がとがめてしまって……それで考えた。垂希子を心配させることや、悲しませることをしてはいけないと思った。弟の存在よりも、守らなきゃいけないものがあることに」

夏彦は、吹っ切れたようだった。

「わかりました。やはり、先輩は、僕の思っていたとおりの人です」

長野も納得して笑顔で答えた。

「すまなかった。おまえにも面倒かけてしまって」

夏彦が、長野に頭を下げる。

「頭を上げて下さい。今夜は、とことん飲みましょう」

そう言って、長野は、店員に瓶ごと芋焼酎を注文した。

彼女は、二十歳の夏、浦安のホテルにいた。
宿泊先のホテルの部屋で、電話が鳴った。
相手は、彼女が待ち望んでいた人物だった。

「えっ!？」

相手が言ったことに、彼女は、驚いた表情で聞き入る。

「わかったわ。ディズニーランドの入場ゲートの前ね。かならず行くわ」
彼女は、重大な約束を取り付けて、静かに受話器を置く。

彼女は、スーツケースから3枚の写真を取り出した。

どれも自分が写っている。少女だった頃に、ミッキーマウスと一緒にの記念写真。水着姿でビーチにいる姿。つい最近のようで、パーティー会場の中のドレス姿。どれも彼女が写っていた。だが、彼女自身、この写真を撮影したことに覚えがない。不可解な謎を知るため、彼女は、手紙の差出人に会いに来た。

彼女は不安を持ちながら、勇気をだして、待ち合わせ場所へ向かった。

⑤ 電話

夏彦は、弟の存在を追及するのをやめたことを、亜希子に告げた。

ここ数日、夫婦の間には穏やかな日々が過ぎている。亜希子に、心配や不安をあたえなくなったことからの安心感が、そうさせているのだろう。夏彦は実感していた。

休日の午後。

「お寺のほうは予約できたわよ」

亜希子が、リビングにいる夏彦に報告する。

「ありがとう」

夏彦は、真一の四十九日法要の案内状を見ながら言う。

「それから、法要後の食事も手配したわよ」

亜希子が、慌ただしく付け加えて報告する。

「なあ、亜希子、本当にお母さんと呼ばなくていいのか？」

夏彦は、宛先が書かれていない招待状を手にして尋ねた。

「お母さんね……………」

亜希子は思い悩むように考えて、「やはり、呼びたくないわ」と、結論付けるように答えた。

「そうか……………亜希子のお母さんとは、しばらく会っていないから、食事だけでもだめかな？」

ここ最近、亜希子は家のことで、母親に会いに行っていなかった。そのことを気遣って誘った。

「うん……………やはり、人前に出ると疲れるようだから、遠慮させてもらうわ」

亜希子は、夏彦の心遣いが嬉しく思った。

亜希子は、養父母に育てられた。実の父親は、亜希子が生まれて間もなく消息不明になり、母親は交通事故死した。そのため、母親の実兄が亜希子を養子にした。兄夫婦は子供がいなかったため、亜希子は実の子供以上に愛情を注いで育ててもらった。亜希子は、養父母のことを心から感謝していた。養父は三年前に他界した。養母は病弱なため、千葉県にある養護老人ホームで生活している。

「それじゃ、四十九日法要が終わったら、お母さんがいる施設に会いに行かないか？」

夏彦が誘った。

「ええ」

亜希子は笑顔で頷いた。

「じゃ行ってきます」

亜希子が、夕食用の食材を買いに家を出た。

夏彦は、法要の案内状を書き終えた。集中しての作業だったので少し疲れた。キッチンへ行き、

冷蔵庫から缶コーラを取り出して飲んだ。炭酸が喉を刺激して美味しく感じた。

リビングのテーブルから、スマートフォンの着信音が鳴った。

夏彦は、缶コーラを手にして、スマートフォンに近づく。電話番号が表示されて、登録されていない電話だった。見知らぬ相手だと、出ることに、ためらいがあった。だが、知人や仕事関係者の電話ならば、出ない訳にもいかない。そう思って、スマートフォンを手にする。

「はい……………」

夏彦が、静かにひと言発した。

「……………」

「福岡教授の息子だな……………」

一瞬沈黙があって、低い声で確かめる言い方をされた。

「はい……………どちら様ですか？」

夏彦は、相手に合わせるように低い声で話す。

「マック・ヤマグチだ……………」

「……………!？」

夏彦は、男の言葉に漠然とする。

「聞こえているか・・・・・・・・？」

マック・ヤマグチからの電話は唐突すぎて、夏彦は一瞬だけ気が動転した。だが、すぐに、「本当に君は、マック・ヤマグチなのか？」と、半信半疑尋ねる。

「そうだ・・・・・・・・知っているかもしれないが・・・・・・・・僕は君の弟になる」

男は、少し間を置いて、はっきりと答える。だが、そのことが、どこかよそよそしく、疑わしいものを思わせた。

「今、どこにいる？」

「はっきりとしたことは言えないが、君とは、近い場所にいるかもしれない」

男は、とぼけているような、言い回しをしているようにも聞こえる。

「それで、自分に何の用事なんだ？」

「欲しいものがある。どうしても、君に会いたい」

男は強い口調で言う。

「欲しいものは何だ？」

「福岡教授と、赤ん坊だった君と一緒に写っている写真だ。裏には、何かの暗号が書いてあるものだ」

夏彦は、秋田が探していた写真と同じものだと直感した。

「わかるか？」

男は、念を押すように尋ねた。

「写真なら渡そう。でも、会うことはできない。そうだ、君の都合のいい送り場所を教えてください。そこに送ろう」

夏彦は警戒した。果たして、今、電話を受けている人間のことを信用していいものか。それと同時に、また、亜希子に心配をかけることになる。そのことを避けるための言葉だった。

「ダメだ！ 直接に受け取りたい。他人まかせだと信用できない」

男は、訴えるように拒んだ。

「頼む・・・・・・・・一刻も早く、写真を手にしてイギリスに帰国したい」

男は、切羽詰まった様子で告げる。

「写真を渡してくれたら、自分と君との出生の秘密を話そう。それから、アールドアンドサンの腕時計は、形見として持っているのか？」

「えっ！？」

夏彦は、驚きの色が浮かんだ。どうして、その腕時計のことを・・・・・・・・

夏彦は、一瞬考えるように間を置いた。そして、

「どうして、親父の腕時計のことや、自分の出生のことを知っているんだ？」

「それは、福岡教授に直接会って聞き出したんだ」

「えっ！？」

男の突拍子もない言葉に、夏彦は仰天する。

「聞こえているか・・・・・・・・？」

マック・ヤマグチからの電話は唐突すぎて、夏彦は一瞬だけ気が動転した。だが、すぐに、「本当に君は、マック・ヤマグチなのか？」

夏彦は、気を取り直して尋ねた。

「そうだ・・・・・・・・知っているかもしれないが・・・・・・・・僕は君の弟になる」

男は、少し間を置いて、はっきりと答える。だが、そのことが、どこかよそよそしく、疑わしいものを思わせた。

「今、どこにいる？」

「はっきりとしたことは言えないが、君とは、近い場所にいるかもしれない」

男は、とぼけているような言い回しをしているようにも聞こえた。

「それで、自分に何の用事なんだ？」

「欲しいものがある。どうしても、君に会いたい」

男は、強い口調で言った。

「欲しいものは何だ？」

「写真が欲しい。福岡教授が、赤ん坊を抱きかかえているもので、裏には、何かが書かれているものだ」

夏彦は、秋田が探していた写真と同じものだと直感した。

「わかるか？」

男は、念を押すように尋ねた。

「写真なら渡そう。でも、会うことはできない。そうだ、君の都合のいい送り場所を教えてください。そこに送ろう」

夏彦は警戒した。電話の相手を信用していいものかと。それに、また亜希子に心配をかけることになる。そのことを避けるための言葉だった。

「ダメだ！ 直接に受け取りたい。他人まかせだと信用できない」

男は、強く拒んだ。

「頼む・・・・・・・・一刻も早く、写真を手にしてイギリスに帰国したい」

男は、切羽詰まった様子で告げる。

「写真を渡してくれたら、君の出生の秘密を話そう。それから、アールドアンドサンの腕時計は、形見として持っているのか？」

「えっ！？」

どうして、その腕時計のことを・・・・・・・・。夏彦は、一瞬、驚いて考えるように間を置いた。そして、「どうして、自分の出生のことを知っているんだ？」

「それは、福岡教授に直接会って、聞き出したんだ」

「えっ!？」

男の突拍子もない言葉に、夏彦は仰天する。

次の日。

「もう食べないの？」

食卓を立った夏彦に、口をつけていないトーストに飲みかけのコーヒーを見て、亜希子が尋ねた。

「ちょっと、食欲がなくて、せっかく作ってくれたのに……ごめん」

「大丈夫？」

「大丈夫だ。着替えてくるよ」

夏彦は、亜希子に気を使わせてしまい、今日のことがバレそうだった。そのため、亜希子から離れるようにして寝室へ入り、出勤の準備を始めた。パジャマを脱いで、スラックスを穿き、ワイシャツを着る。ネクタイを手にして、壁掛の鏡に映った自分の顔を覗くと、顔色がスッパリしていない。原因は、彼からの電話であることは、わかっていた。

夏彦は、彼と会うことを決めた。だが、彼は窃盗犯で、何か大きな組織に関わっている、要注意人物だとも言われている。彼に写真を渡したところで、口封でナイフや拳銃が飛び出ることもあるかもしれない。そのことを想像すると、不安で一睡もできなかった。会うことを拒めばいいと思っただが、彼はあきらめないだろう。何度も、自分に接触を望んでくるだろう。彼にも譲れない何かがあることを、電話の中で感じとっていた。それならば、早くケリをつけたほうがいいと、夏彦は思った。

「ねえ、あなた！！」

急に後ろから声がした。夏彦は、ハッと振り向く。そこに亜希子がいた。

「どうしたの？ さっきから呼んでいたのに、まったく気付かないから」

亜希子は、リビングで充電していたスマートフォンを持っていた。

「すまない……ちょっと考え事をしていたから」

夏彦は、亜希子が寝室に入ってきたこともわからなかった。

「ありがとう」

夏彦は、バツが悪いように苦笑いして、スマートフォンを受け取った。

「行ってらっしゃい」

玄関の取次ぎで、亜希子が笑顔で夏彦を送り出す。

今日に限って夏彦は、亜希子の表情が愛おしく思えた。これが亜希子の顔を見る、最後の日になるかもしれない。そう思うと、夏彦は、グツと心にくるものを押し殺した。

「じゃ、行ってくるよ。 あっ！ そうだ。今日は遅く帰るから、先に休んでいいからね」

夏彦は外に出る時、思い出したように言う。

「遅くなるって!？」

急なことで、亜希子は気になった。

「会社の人間と食事をすることになったんだ」

「そう……」

亜希子が頷く。

「それじゃ」

夏彦は玄関を出て、ゆっくりとスライド式の扉を閉めた。

亜希子は、夏彦を送り出すと不安な気持ちが誘った。すると、エプロンの前ポケットから、スマートフォンを取り出し、どこかに電話をする。

「亜希子ですが、頼みたいことがあるんです」

亜希子は、声を震わせていた。

夏彦は家を出て、すぐに会社に電話をする。体調不良という口実で休むことを告げて、すぐにタクシーを拾った。

「横浜まで行って下さい」

夏彦は、運転手に行き先を告げて、後部座席に身を沈めるように座った。タクシーが動き出した。フーと息を吐いた後、上着の外ポケットから、アールドアンドサンの腕時計を取り出して見つめる。すると、どこか張り詰めるものがある。再び、フーと息を吐いて気を引き締めた。

タクシーは、横浜ベイサイトマリナーの建物前で停まった。夏彦が、タクシーから降りると海の方へ歩いてゆく。空は雲ひとつない青空だった。潮の香りがして、穏やかな風が吹いていた。数隻の小型クルーザーが、横づけされてある場所まで来ると、夏彦は足を止めた。

「どこにいるんだ？」

夏彦は、人の気配を感じてクルーザーの方に向かって言う。

一隻のクルーザーの中から男が現れた。男は、キャップ帽を被り、レイバンのサングラスをしていた。クルーザーから降りて、夏彦の前に立つと、自分と背格好は同じだった。

「君がマック・ヤマグチなのか？」

夏彦は半信半疑で尋ねた。

「ああ、そうだ」

男はサングラスを外す。すると、夏彦は目を丸めた。まるで、鏡に映った自分を見ているのように、そっくりだった。

「写真は持っているかい？」

マック・ヤマグチは、真っ先に用件を言う。

「ああ……でも、渡す前に少し話さないか？」

「そうだな。せつかく会えたんだ……用だけすませて、サヨナラっていうわけにはいかないな」

マック・ヤマグチは、照れたように笑った。

夏彦は不思議な感覚だった。自分と瓜二つの人間を目の前にすると、やはり兄弟だと思える。心の準備は出来ていたが、会った瞬間に感動的なものかと思っていたが、今あるのは冷静な部分だけだった。やはり、警戒心のほうが強いいため、他人行儀なよそよそしさがある。だが、傷害事件を起こした凶暴な雰囲気は感じなかった。

「どうやって、自分の携帯番号を知った？」

夏彦は、ずっと疑問に思っていたことを尋ねた。

「自分は、イギリス政府機関の人間からの指示で、福岡教授が残した暗号を手に入れるために日本に来た。その時に教えられた。イギリスの情報機関にとっては、他人の携帯番号を調べるなど簡単なことだろう」

「そうか……それにしても、外国で長く生活しているようだが、どうして日本語を話せるんだ？」

夏彦は、もうひとつ感心したことを尋ねた。

「育ての両親は、アイルランド人だった。その両親から、おまえは、日本人の血が流れているから、母国である言葉を覚えておく必要があると言われて、日本語の勉強をさせられた。なんで、そんなことをしなければいけないのかと、わからなかったが、今はわかるよ」

マック・ヤマグチは、海の方へ目をやる。

「何がわかるんだ？」

夏彦は、マック・ヤマグチの背中に尋ねた。

「この日本に来るためだ。おそらく、イギリス政府からの指示でそうされたんだろう」

マック・ヤマグチは、わかりきったような口ぶりだった。

「正直、半信半疑で日本に来たが、福岡教授に会って話を聞いて、自分の出生がわかったよ」

「親父とは、いつ会った？」

「福岡教授が亡くなった日だ。そして、自分は、君のクローン人間として生まれたことを知った」

「……！？」

マック・ヤマグチの言葉に、夏彦はキョトンとする。

真一が亡くなった日。

「それでは行ってきます」

家政婦の宮崎は、真一に外に出ることを告げる。

「無理を言って悪いが、どうしても急に食べたくなくてね」

真一は、鎌倉にある和菓子店まで菓子を買ってきてほしいことを、宮崎に頼んだ。

「すぐに帰ってきます。痛みがあったら、かならず薬を飲んで下さい」

宮崎は、薬のことを気にかけて家を出た。

宮崎が玄関から外に出るのを、マック・ヤマグチは、隣の家の壁から身をひそめながら見ていた。宮崎の姿が自分の視界から消えた時、携帯電話が鳴る。

「わかった」と、携帯電話で返事をする。

マック・ヤマグチは、キャップ帽を深く被って、用心深く周りを見渡しなが、福岡家の玄関まで来る。スライド式のガラス戸に手をやると、鍵が開いていた。ゆっくりとガラス戸を横にずらして中を覗く。

「待っていたよ」

杖を持った真一が立っていた。

マック・ヤマグチと真一は、客間のコーヒーテーブルを挟んで差し向えに座った。

「会えるとは思わなかったよ」

真一は、意外そうな言い方をするが、嬉しい表情を見せた。

「電話で話したものが欲しい」

マック・ヤマグチは、硬い表情のまま言う。

「そうだったな」

真一は、着ているガウンの外ポケットから、写真を取り出してテーブルに置いた。

「この子は誰だ？」

マック・ヤマグチは、写真を手にして尋ねた。

「この写真は君だ」

真一が答えると、マック・ヤマグチは写真をじっと見つめた。

「この写真には、どんな暗号が隠されているんだ？」

「写真の裏に書いているものが暗号だよ」

言われるまま裏を見ると、『愛しき我が子』と書いてあった。

「この言葉に……？」

マック・ヤマグチは、不快そうに尋ねた。暗号というから、もっと複雑な数字や文字で組み合わせられているものを想像していた。

「その写真を、イギリスの研究者の人間に渡せば解読できるはずだ。但し、有能な者だったらな」

真一は、自信ありげに言う。

「もらってゆくよ」

マック・ヤマグチは、写真を上着の内ポケットに入れると、気になることを口にした。

「自分は、レプリカ計画で生まれたと聞いたが・・・・・・・・レプリカって、一体何のことなんだ？」

「それを、どこで知った？」

真一が真顔で尋ね返した。

「イギリス政府の情報機関の女性から、日本に向かう前に教えられた。あんたの電話番号と一緒に……でも、レプリカの意味は聞き出せなかった。教授から、直接聞き出せと言われた。俺は、何で日本まで来て、あんたと会っているのかも、よくわかっていない」

マック・ヤマグチが、怒りを抑えながらも愚痴るように言う。

「そうか……」

真一の顔が青ざめる。

「すまないことをした……私は学者のエゴで、おまえにも、辛い思いや迷惑をかけてしまった」

真一が、マック・ヤマグチに向かって頭を下げた。

「何を謝っているんだ？」

マック・ヤマグチは、真一の態度が理解できなかった。

「レプリカ計画とは、遺伝子細胞の研究で、クローン人間を作るのが目的だった。それで、君が、その研究で生まれた人間だ」

「……!？」

思いもよらない真一の言葉に、マック・ヤマグチは目を丸くして、「今、何と言った?」と、尋ね返した。

「私は、息子の夏彦の細胞を利用して、クローン人間を作った。それが君で、言い方はおかしいかもしれないが、夏彦の弟になる」

「何、言っているだあ……俺は、両親はわからないが、イギリスの病院で、母親のお腹から生まれてきたんだ。そんな。誰かの研究で生まれてきたんじゃない」

マック・ヤマグチは、強い口調で否定的に言う。

「……」

真一は黙ったままだった。そのことが真実を語っているように思えた。

「本当のことなのか?」と、マック・ヤマグチは確かめるように静かに尋ねた。

「すまなかった」

再び、真一は頭を下げた。

「謝ったりするなよ!」

マック・ヤマグチは、吐き出すように言う。

「あんたに謝られたりしたら、自分自身、生まれてきたことが、何か悪い意味があるように思うじゃないか……自分は、クローンなんかじゃない。研究のために生まれたんじゃない。自分は、自分の意思で生まれてきて、今まで生きてきた」

マック・ヤマグチは、訴えるような言い方をする。

「そうだな・・・・・・・・おまえは自分の意志で生まれてきた」
真一は、意味ありげに言う。

「私は、遺伝子細胞には、限りない可能性があると感じて研究を始めた。病で臓器の提供を待つ人のために、遺伝子細胞を利用して、臓器そのままを作ることができないかと研究を続けていた。だが、日本では、研究を続けるための、資金や環境が整わなかった。そんな時、イギリス政府が、私の研究を理解してくれて声を掛けてくれた。但し、それは、クローン人間を作るための、国家機密の研究として支援する条件だった」

急に真一が咳込む。

「大丈夫か？」

マック・ヤマグチが気に掛ける。

「大丈夫だ……その時の私は、まだ駆け出しでの学者で、どうしても研究を成功させてみたいという欲があった。もしも、クローン人間を作れる技術を手にいれられたら、人間の臓器も、簡単に作れると思った。そう信じて、イギリスへ行くことを決めた」

再び、真一は咳をする。今度は大きく息をした後、話始めた。

「1996年7月に、イギリスで、クローン羊のドリーが誕生した。当時は、まだクローン技術は、そんなに進歩してはいなかった。だが、それは表向きのことだ。それ以前に私の研究で、イギリスは、クローン人間を作ってしまった。だが、結果的には、私の妻や、助手の秋田君を狂わせることをしてしまった」

「自分は、どういうふうに生まれたんだ？」

マック・ヤマグチは、生まれた時のことが気になった。

「簡単に言えば、妻の胎児の細胞の一部を取り出して、化学反応させて、もうひとつの細胞を作り出した。それが胎児の原型になって、試験官で育てた。夏彦が生まれる時と同じくして、君も生まれた」

「……………」

マック・ヤマグチは、眉をひそめながら聞き入る。

「だが、妻は知ってしまった。自分の出産が、夫の研究の道具に使われたことに。すごくショックを受けていた。私はその時、初めて後悔の念を強く感じた。それから妻は、精神的な病になって体調を崩した。すべては私の責任だ……………私のやったことは、人を傷つけるものにしかならなかった」

真一は、深刻な表情をした。

「やがて、世界各国は、クローン人間を作ることを禁止するようになっていた。人間の倫理に反することだというのが理由のようだ。それに賛同するように、イギリスもクローン人間の禁止を

することにした。作ったという事実を隠して・・・・・・・・」

再び、真一は深く息を吐いた。

「私は妻の治療のために、イギリスを離れることを決めた。遺伝子細胞の開発は、助手の秋田君が引き継ぐことになった。秋田君には、クローン人間を作ると禁じて帰国した。だが、彼は、私の忠告を裏切った。そして、私が残してサンプルを利用して、クローン人間を作ったことを知った。だが、その彼も、今は追い詰められているようだ。まったく愚かだ」

真一は、嘆き余る言い方をする。

マック・ヤマグチは、自分の出生の秘密を聞かされて動揺をしながら、

「自分は、どうして、アイルランドで生活するようになったんだ？」

「日本に帰国する時、妻は、おまえを日本に連れて帰って、息子として育てたいと言った。私も、そのつもりだった。だが、イギリス政府は、それを許さなかった。人類初のクローン人間は、政府が管理するということで、手放すことができないと言われた。結局、君を残して帰国した」

再び、真一は咳込み始めた。

目の前に一羽の海鳥が、パタパタと羽をたたんで降り立った。

「君がオリジナルで、俺がクローンだ」

マック・ヤマグチは、夏彦に背中を向けて海の方を見ながら言う。

夏彦は、マック・ヤマグチの話に啞然とした。

「結局、咳は止まらず、話ができる状況などではなかった。それでも、最後に力を振り絞るように、自分の顔を見て、『自分らしく生きろ』と、言ってくれた」

『自分らしく生きろ』と、言ったその言葉には、真一の強い思いがあるように、夏彦は思った。

マック・ヤマグチが振り返る。

「あの人には、いろいろ言いたいことはあったけど、病人で辛そうな姿を見たら、何も言えなくなっちゃったよ」

夏彦は顔を青ざめていた。自分の誕生が、実験的なことに使われていたことの驚きと同時に、マック・ヤマグチのことを考えると心が痛んだ。

「俺は、どんな境遇で生まれても、前向きに生きようと思っている。」

マック・ヤマグチは、吹っ切れたように宣言する言い方をする。

「親父さんは、どんな性格だったんだ？」

マック・ヤマグチが、真一の人物像について尋ねた。

「どんな人……！！？」

夏彦は、返事に困った。生前、真一を避けるようにしていたため、急に尋ねられても、すぐに答えられなかった。

「やはり、あまり仲が良くなかったのか？」

マック・ヤマグチは、知っているような口ぶりだった。

「どうして、そのことを？」

夏彦が不思議そうに尋ねた。

「あの人が言っていた。息子には、父親らしいことをしてやれなかった。すまないことをしてしまったと……」

「本当にそう言ったのか？」

夏彦は、信じられない様子だった。

「学者というから、気難しい人物だと思っていたが、会ってみて、温厚で優しい感じだった。それに、亡くなった奥さんのことを思い続けていたようだった。もうすぐ妻の所へ行けると、笑みを浮かべていたよ」

マック・ヤマグチは、受けた印象のままを言った。

「きっと、君に対しては、親らしいことが出来なかつた理由が、あつたんだろう」

「・・・・・・・・」

夏彦は、マック・ヤマグチの言っていることが意外だった。もっと、真一のことを罵声すると思っていたからだ。

「君には、悪いことをしてしまったと思う。あの時、あの人をベッドまで連れて行って、薬を飲ませることができたら、まだ生きていたかもしれない」

マック・ヤマグチは、後悔しているようだった。

「・・・・・・・・」

二人の間に少しの沈黙があった。それは、真一の死を悼むようだった。

急にパタパタと、目の前にいた海鳥が、羽をひろげて飛び立つ。一瞬、二人の視線は海鳥の方へ向ける。

「君は結婚しているのか？」

マック・ヤマグチは唐突なことを尋ねる。

「ああ・・・・・・・・」

夏彦は頷いて答えた。

「そう、結婚っていいものかい？」

マック・ヤマグチは、興味深く尋ねる。

「そうだな。結婚して幸せだと思っているよ」

夏彦は、少し照れながら言う。

「そうか・・・・・・・・いいものか」

「君は、結婚するような女性はあるのか？」

「イギリス人の恋人がいるんだ。プロポーズしようと思っている」

マック・ヤマグチは、顔がほころんで嬉しそうに言う。前向きに生きようと言った理由は、恋人の存在があるからだろう。夏彦は、彼は優しい男だと思った。

「それじゃ、その彼女を幸せにしないと」

「ああ」と、マック・ヤマグチは嬉しそうに頷いた。

「そろそろ、行かなきゃいけない。もらえるかい？」

マック・ヤマグチが、チラリと腕時計を見て、時間を気にするように言う。

夏彦が写真を取り出し、マック・ヤマグチに渡す。

「この写真には、どんな謎が隠されているんだ？」

夏彦が興味深く尋ねた。

「自分にもわからない。おそらく、イギリスの政府機関に雇われた学者が、解読することになっている」

「そうだ・・・・・・・・これ、君に渡そうと思って、親父が使用していたものだ。亡くなった時、持っていた。君に会った時、渡そうとしていたんだろう」

夏彦は、ポケットから、アールドアンドサンの腕時計を取り出す。

「それは君が持つておくべきだ。あの人が、その腕時計を自分に渡そうとしたが断った」

「どうして、断ったんだ？」

「その腕時計は、福岡教授の奥さんから・・・・・・・・つまり、君のお母さんから、誕生プレゼントされたものだと説明された」

夏彦は、初めて聞かされることで、手にした腕時計に目をやる。

「自分にとっては、アイルランドで育ててくれた父と母が、本当の両親だと思っている」

マック・ヤマグチは、自分の気持ちを言い切った。

「それに、自分には、その腕時計には思い出がないからだ。君の方こそ、思い出が、あるんじゃないか？」

「・・・・・・・・」

マック・ヤマグチの言っていることに、心当たりがあった。

「そうだな」

夏彦が腕時計をポケットにしまい込んだ。

マック・ヤマグチが、遠くの方に目をやる。制服の警察官が、数人駆け寄ってくるのが見えた。

「そろそろ失礼する、会ってくれてありがとう。元気で」

マック・ヤマグチは、逃げるように小型クルーザーに乗り込む。

「君のほうこそ元気で」と、夏彦が言う。

マック・ヤマグチは、夏彦に笑みを見せて操縦席の中に消えた。

エンジンがかかり動き出す。

夏彦は、見送るように眺める。

クルーザーは加速して、沖の方に向かおうとした時だった。バーンと、大きな爆発音がした。夏彦は、反射的にしゃがみ込んだ。クルーザーから、炎が飛び散り大きく黒煙が上がる。

夏彦は、凍りつくように炎上するクルーザーを見た。

埠頭近くで、山形が車の中から、炎上するクルーザーを見て驚きの顔色を浮かべた。後部座席には、二人のC I A捜査官がいた。

年配のC I A捜査官が、納得したように薄ら笑いをする。

「レット・ゴー」

連れの若いC I A捜査官は、山形に指示する。

「オーケー」

山形は、我に戻って車を出した。

制服の警官を引き連れていたのは、長野だった。

長野が、真っ先に夏彦に近寄る。

「先輩、大丈夫ですか？」

「ああ……」

夏彦は、表情をこわばらせて、言葉が出なかった。

すぐに、消防艇が取り囲むようにして消火活動を始める。どこからか野次馬が集まって来た。

長野は、夏彦に付き添い、マリーナ近くのクラブハウスへ歩いて行く。その時、目の前を白いスカイラインが走り去って行く。一瞬、長野は眉をしかめて、スカイラインを目の端で追った。

夏彦は、クラブハウスの外にある長椅子に腰かけた。

「どうぞ」

長野が、販売機で買った缶のホットコーヒーを渡す。

「ありがとう」

夏彦は、ホットコーヒーをすする。

「どうして、ここがわかったんだ？」

落ち着きを取り戻した夏彦が、不思議そうに尋ねた。

「亜希子さんが電話をくれました。先輩の様子がおかしいことを言われて、彼に会うかもしれないと心配していました。それで、先輩の後を追ってほしいと頼まれたんです」

長野が、上着のポケットから、スマートフォンを取り出す。

「亜希子さんが、先輩のスマートフォンのGPS機能を作動していると言っていました。そこから、ここを割り出しました」

夏彦は、亜希子が充電したスマートフォンを渡しに来たことを思い出す。その時に、GPS機能を作動させたことは想像できた。

「でも、無茶ですよ。黙ってマック・ヤマグチに会うなんて」

長野は穏やかに言っているが、明らかに目は怒っていた。

「悪かった」

夏彦は、すまなそうに謝る。

「なあ、彼はどうなった？」

夏彦はわかりきっていたが、一部の望みをこめて尋ねた。

「ようやく、消火活動が終わったところですが……おそらく、助かっていないと思います」

長野は、夏彦の気持ちに反するように、言いにくそうに答えた。

「そうか・・・・・・・・」

夏彦は、落胆した様子で両手を顔に埋めた。

「マック・ヤマグチは犯罪者です。どういう経緯で会うことになったのか、参考までに、署で話を聞かせてもらうことになります」

「わかった」

夏彦は、弱々しい返事をする。

横浜警察署の署内で、夏彦は刑事に事情聴取を受けた。

「どうぞ、お帰り下さい」

刑事が、捜査係のドアを開ける。

夏彦は、外国人の逃亡犯と密会していたことで、みっちり刑事から、しぼられると覚悟していた。しかし、マック・ヤマグチと会話した内容を話ただけで、簡単に終わった。

捜査係から出ると、長野が待っていた。

「大丈夫でしたか？」

長野が気にかけた。

「ありがとう。おまえのおかげで、早く終わったよ」

夏彦が、こんなに早く事情聴取が終わったのは、長野が手を回してくれたと思った。

「いえ、僕ではありません」

「えっ!？」

夏彦が意外そうな顔をする。

「マック・ヤマグチなんて人間は、日本に入国していないというのが、警察の報告です」

長野は、渋い表情で答えた。

「何だって……!？」

夏彦が目丸めた。

「僕にもわかりませんが、何かしらあるようです。とにかく出ましょう」

二人が、警察署を出ると夜になっていた。夏彦は、慌ただしく時間が過ぎたことに気付いた。

外で亜希子が待っていた。

夏彦の顔を見るなり、亜希子は、血の気がサッとひくように顔がほころんだ。

「心配かけて、すまなかった」と、夏彦は亜希子を抱き寄せた。

「僕が家まで送ります」

長野が、自分の車に二人を乗せた。

長野の車は、海沿いを走っている。

夏彦は、ぼんやりと車窓から、真っ暗な風景を眺めていた。

「ねえ！ あなた」

亜希子の左手が、夏彦の右肩を揺さぶる。ハッと夏彦がする。

「どうかしたの？」

亜希子が声を掛けても、返事をしない夏彦が気になった。

「ちょっと考え事していた」

「何を考えていたの？」

亜希子が怪訝な顔をする。

「彼は、自分と会った時、どんな気持ちだったんだろうか？」

「気持ち・・・・・・・・！？」

「正直、自分自身・・・・・・・・彼と会った時、なぜだか、少しだけ嬉しい気持ちがあった。もう少し、いろいろと話しをしてみたかった・・・」

夏彦は、思ったままを口にした。

「・・・・・・・・」

亜希子は、何を言わず両手を、夏彦の右手に触れた。亜希子の手のぬくもりが、夏彦の体中に伝わってくるようだった。

長野は運転席のバックミラーで、二人の夫婦愛みたいなもの感じていた。しかし、頭の中では、走り去ったスカイラインのことが気になった。確かめる必要がある。そう思いながら、車を走らせた。

⑥ 真実

成田空港の国際線ターミナルに、山形は、C I A捜査官の見送りに来ていた。

「サンキュー ミスター・ヤマガタ」

二人のC I A捜査官が、山形に握手を求めた。

「プリーズ テイク ケアー 」

山形は、笑顔で握手を交わす。二人のC I A捜査官は、出国審査室の中に入って行った。

「友好的な別れだな」

山形の後ろから、聞きなれた声がした。

一瞬、山形がハツとして振り返る。そこに長野がいた。

「何だ、おまえか・・・・・・・・」

山形から笑顔が消えて、いつもの強面の表情に戻る。

「おまえ、俺の跡をつけていたのか？」

山形は、バツが悪いように言う。

「あの日、俺の跡をつけたように・・・・・・・・おまえに聞きたいことがある」

長野は、クルーザーが爆破された日のことを言った。

「わかったよ。おまえには、悪いことをしたと思っている」

山形は、言い訳することもなく、あっさりと応じるように答えた。

二人は、空港内にあるカフェ・バーに入った。店内の窓一面は、滑走路に面していて、飛行機の離着陸を眺められる。窓際のカウンター席に座り、二人は、ブレンドコーヒーを頼んだ。

「聞きたいことってというのは？」

山形は、長野の顔を見ずに、飛行機を眺めながら尋ねた。

「おまえ、初めから、CIA捜査官とぐるだったんだな。一体、何の目的があったんだ？」

長野は、厳しい顔つきで尋ねた。

長野は、マリーナでスカイラインを運転する、山形の姿を見かけた。後部座席には、外国人の男が乗っていた。その時、山形が現場に現れたことが不思議に思えた。すると、ひとつの推測が思い浮かんだ。

窓の外で、一機のジャンボ機が滑走路へと向かってゆく。

「俺は、福岡教授が亡くなった日、警視総監じきじきに、CIA捜査官と、一緒に捜査することを命じられた。元々、CIA捜査官が、独自に日本で捜査していたんだが、どうやら手詰まりになったらしい。そこで、アメリカ政府が日本政府に頼んで、警察庁が動いたわけだ」

女性店員が、コーヒーを持って来た。山形は渋い表情で黙った。コーヒーが、カウンターの上に置かれて、女性店員が離れた。

「おまえも、わかるだろう。警察も権力で、ものを言われるところだからな……」
山形が、砂糖をコーヒーカップに入れる。

「おまえと、福岡夏彦が、知り合いだったおかげで、初めのうちは、捜査がやりにくいこともあったが、そのうち利用できることを考えた」

「捜査の目的は何だ？」

「捜査内容は、マック・ヤマグチの拘束だと言われていたが、本当のところは、別の目的があった」

山形が意味しげに言う。

「別の目的？」

「暗号を手に入れることだ」

「暗号って何だ？」

「このまえも話したが、レプリカ計画というのが、福岡教授の研究したものと、大きく関係しているらしい。そして、アメリカとイギリスの国家機密になっている」

山形は、コーヒーカップを手にした。

「C I A捜査官の話では、マック・ヤマグチは、福岡教授が残した暗号を手にするために、日本に入国したと聞かされた。秋田博満も同じように、その暗号を手にしようとしていた」

「・・・・・・・・」

山形は、ひと口コーヒーすすった後、「俺は、C I A捜査官から監視目的で、秋田博満のことを見張ることを命じられた。危険な行動が伴うため、警固の意味もあったらしい」

「秋田博満は、なぜ殺されたんだ？」

「俺もよくわからないが、何者かが、暗号を聞き出したら、秋田を始末しろと指示をした者がいるらしい。それで、俺は、しくじってしまった」

山形は、渋い表情をした。

「しくじった・・・・・・・・！？」

長野は、その言葉に反応する。

「あの日、秋田博満は、急ぐようにして宿泊先のホテルを出て行った。ホテルのロビーで見張っていた俺も、後をつけて外に出た時だった。男とすれ違い際、スプレーを顔にかけられた。一瞬目が痛くて、その場に、ふさぎ込んでしまった。それで、秋田博満を見失って……その結果、ひき逃げ事件になってしまった」

山形は、悔しさをグッと押さえるように唇をかみしめた。

「おそらく、俺の顔にスプレーをかけた人間が、秋田博満を殺害したんだろう」

「殺害したのは、何者だ？」

山形は人には聞かされないように、長野の方に向いて、「たぶん、M I 6の連中だろう」と、小声で言う。

「M I 6って!？」

長野は、一瞬驚いたように声を出すも、「イギリスの情報機関が？」と、小声で尋ね返す。

「M I 6の捜査官の中には、殺しのライセンスを持っている人物もいると、言われているからな……」

「M I 6の連中は、何の目的があって、秋田博満を追っていたんだ？」

「元々レプリカ計画は、イギリスで、福岡教授が研究したものだ。その研究内容を助手の秋田博満が、アメリカに売り渡した。そこで、イギリス政府が動いたわけだ。M I 6の連中も暗号を手に入れるため、日本に潜入していることまではわかっている」

「レプリカ計画っていうのは、一体何だ？」

「秋田博満は、福岡教授と同じ遺伝子細胞の研究で、クローン人間を作ったらしい」

「クローン人間！ それって、同じ人間を人工的に作ることだよな？」

長野は、耳を疑うように尋ね返した。

「C I A捜査官の説明が、本当のことを言っているのかわからないが、『レプリカ計画』というのは、クローン人間のことをいうようだ」

「ひょっとしたら、先輩の弟というのも、クローン人間ということなのか……でも、クローン人間を作るとは、禁止されているんじゃないのか？」

長野は、夏彦のクローン人間がいることが、信じがたい様子だった。

「さあ……俺には、そんなことはわからんよ。だが、イギリスは、2019年にユーロを離脱するため、かなりの清算金が必要になる。そのためには、何か大きな国益になるものが必要になる」

「それが、福岡教授の研究技術になるのか？」

「ああ、そういうことだ」

山形が渋い表情をする。

「有名な歴史上の人間も、髪の毛一本の細胞があれば、瓜二つの人間を誕生させることができる。そんな、夢みたいな技術を欲しがっている人間がいるのは事実で、それが大きなビジネスになる。両国は、それを欲しがっている。まったく恐ろしいことだ」

山形は、脅威的な考えで言っているようだった。

「秋田博満は、研究技術をアメリカに売り渡したと言ったな。それなら、両国の人間が、福岡教授の残した暗号を手に入れるために、何で、また日本まで来たんだ？」

長野が、一番に謎だと思いを尋ねた。

「秋田博満は、クローン人間の成功は一回きりだった。それは、福岡教授の手掛けたものを、そのまま使って偶然にできたものだった。だが、それをあたかも自分が研究して、成功したものとして、イギリス政府を騙していた。だが、何年経っても研究の成果は上がらず、二度とクローン人間を作りだすことはなかったそうだ」

「イギリス政府は、秋田博満の不正を調べようとはしなかったのか？」

「イギリス政府も、秋田博満では、クローン技術の開発は無理ということがわかったんだろう。そして、福岡教授の技術を盗んだだけだということも。そうすると、秋田博満は犯罪者扱いになる」

一機の大型ジャンボ機が、夕暮れの滑走路を離陸してゆく。

「身の危険を感じた秋田博満は、研究したクローン技術をアメリカ政府に売り渡した。自分の身を守るという条件にして、アメリカ政府配下の学者になった。そんな時、福岡教授が残した、クローン技術の暗号があることが知って、秋田博満が動いた。同じくして、マック・ヤマグチも日本に来ている。水面下で、両国がその暗号のことで争っていたんだ」

山形は、話の途中、コーヒーをすすって、

「厄介なものをアメリカに売り渡すから、秋田博満は、命を落としたのかもしれないな」と、自分の思ったことを言った。

「ひき逃げ事件はどうなる？」

「迷宮入りだな……CIA捜査官も、これ以上は、捜査しないでほしいことを言って帰国した」

「クルーザーを爆破したのは誰だ？」

「それは、はっきりしたことはわからないが……」

山形は、ためらいがちになり、チラリと長野を見る

「誰がやったんだ？」

山形が、はぐらかさないように、長野は睨みを利かす。

「おそらく、アメリカ政府に雇われた人間がやったんだろう。俺自身も、そのことは知らなかった。あの時、マック・ヤマグチを拘束するため、捜査官二人と一緒に埠頭にいたんだが、あんなことになるとは……」

山形は、クルーザーが爆破された時、CIA捜査官の薄笑いが思い浮かんだ。

「マック・ヤマグチの死体は見つかっていないのに、どうして、CIA捜査官は帰国したんだ？」

長野は、思いもよらない言葉に目を丸めながら尋ねる。

「両国との間で、円満な話し合いが出来たと、CIA捜査官は言っていた」

「何てことだ……両国の利益のために、二人は、犠牲になったということなのか？」

長野は、両国の陰謀に納得しない様子で、顔をしかめた。

「日本政府としては、両国との付き合いがあるため、それ以上は関わらないことで、この件は終わりだ。おまえを騙すようなことをして、悪いと思ったが、これも任務だ。俺は、自分に与えられた仕事をしただけだ」

山形は、クールに言い切る。

「どうして、おまえ、上の者に逆らってまで、ひき逃げ事件を捜査したんだ？ 今回の件で、おまえは、完全に出世コースから、外れてしまったようなものだろう」

山形が不思議そうな顔をする。

「そんなことは、十分わかっている」

長野は、後悔するようなことはない様子で答えた。

長野は、警察庁から異動になった。そのことを告げるため、夏彦に会った。

「申し訳ない。自分が無理を言ってしまったから、おまえに迷惑をかけてしまった」

長野に向かって、夏彦と亜希子が正座をして頭を下げた。

長野は、困った様子だった。

上司に逆らって、秋田博満の捜査を続けたことで処分を受けた。それが異動の理由だった。

「どう詫びていいのか、おまえの警察官としてのキャリアに傷をつけてしまった」

夏彦は、頭を下げたまま言う。

「頭を上げて下さい」

夏彦と亜希子が頭を上げる。

「今度、鹿児島県警に行くことになったので、二人で、来ることがありましたら案内します」

「鹿児島か……随分、遠いところに行くんだな」

夏彦が寂しく言う。

「大丈夫です。僕は、こんなことで終わる人間ではありません。また、警察庁に戻ってきます」

長野は、堂々と晴れ晴れしく答えた。

「それに僕は、父親の遺言を果たしただけです」

「えっ!？」

長野の言葉に反応するように、夏彦と亜希子は、顔を見合わせた。

「それは、どういうことだ？」

夏彦が怪訝な顔で尋ねる。

「親父が亡くなる前に話してくれたんです。福岡教授には、返しきれない恩があることを……」

「恩って……?」

「先輩は、知らないと思いますが、実家のガラス工場が、倒産する危機がありました。親父の作るガラスは、薄くても割れない、頑丈なものを作る技術を持っています。でも、小さな町工場では、その技術を認められることは難しかったようです。それで経営が行き詰まって、工場を畳むことを考えていた時、福岡教授から、実験用のガラスの器具の注文を受けて、何とか工場も立て直すことができたそうです」

「そんなことがあったのか……」

夏彦は、初めて聞かされることだった。

「福岡教授から、親父が作るガラスには、心があるとされたそうです。その言葉は、職人の親父としては、最高の誉め言葉で嬉しかったようです。あの時、福岡教授が声をかけてくれなかったら、僕ら家族も、どうなっていたか、わからなかったのは事実です。親父が息を引き取る前、

もし先輩に何かあったら、手を貸してやって欲しいと言われました。だから、僕は、親父の意思を叶えただけです」

長野は、父親の思いを代弁するような言い方をした。

「息子の自分に対しては、厳しだけの父親だったが、他人に対しては、優しい一面ばかりあるなんて・・・・・・・・」

夏彦は、真一の写真を見ながら意外そうに言う。

「でも、どうして親父は、彼と会った時、写真を一枚しか渡さなかったんだろうか？ その場で、二枚渡していたら、彼も、あんなことに巻き込まれることもなかっただろう」

夏彦は、長野から、マック・ヤマグチの遺体は見つかっていないことを知らせていた。生きていることを望んでいる反面、絶望的なことは想像できた。

「僕の推測ですが……福岡教授は、わざとマック・ヤマグチに、一枚しか写真を渡さなかったのではないのでしょうか」

「……………」

長野の言ったことに、夏彦が首を傾げる。

「きっと、福岡教授は、二人を会わせようと思ったんでしょう」

「どうして、そんなことを？」

「クルーザーに乗っていたのは、マック・ヤマグチではなく、横浜在住のイギリス人男性というのが、警察の捜査報告になっています。僕自身、警察の人間でも、なぜ、嘘の報告をしているのかわかりません。おそらく……………」

長野は、真一の写真の方に目をやる。

「マック・ヤマグチという人物が実在すると、困る人間がいるのは事実のようです。そのため、彼を抹殺することを、考えている人間もいるのも確かです。ひょっとしたら、先輩自身も、彼の存在を気付かないまま、生きてゆくことになっていたかもしれません」

「そうだな……………」

夏彦は、長野の言ったとおりでと思った。

「だから、そうならないように、福岡教授は、先輩に弟の存在を知ってもらうために、彼を引き合わせるように仕組んだ。そのため、一枚しか暗号入りの写真を渡さなかったのかしれません。それが、福岡教授の親心では、ないのでしょうか」

長野の言ったことは、的をえているように思えた。

「福岡教授は、息子である先輩に、父親らしいことをしなかったのも、彼の存在があったからでしょう。先輩に愛情を向ければ、彼に対して、気の毒に思えて仕方なかった。だから、わざと先輩には、父親らしいこともしなかった。そうすることが、福岡教授自身が起こしてしまったことへの、つぐないだったのではないのでしょうか……………」

「つぐない……………」

夏彦が、長野の言葉をかみしめた。

真一は、器用に生きられる人間ではない。そうでなければ、イギリスから帰国することもせず、もっと違った人生になっていたはずだ。だが、そのことよりも、自分のために病気になった妻のことを気にかけた。そして、日本で自分の研究を続けた。『覚悟がいる』と、言ったことは、真

一自身に言い聞かせていたのかもしれない。真一は、イギリスでの研究が、成功であり、失敗でもあったことを認識したんだろう。真一は、つぐなうという生き方を選んだ。

そんな父親の思いを亡くなった後で知ることになるとは、夏彦は皮肉に思えた。

「あと、どうしても、気になることがあります」。

「何だ？」

長野の意味ありげな言葉に、夏彦が尋ねた。

「秋田博満は、クローン人間を作ったということです。その人物は、今、どこにいるんでしょうか？」

「もう、その話はやめよう」

夏彦は、否定的な言い方をする。

「今回のことで思ったんだが、彼と、同じ境遇で生まれた人間がいたとしても、きっと、どこかで、自分らしく、真面目に強く生きているんじゃないだろうか。少なくとも、自分は、そう思いたい」

夏彦は、真一の研究で、誰かを不幸にさせたくない思いがあった。

亜希子と長野は、夏彦の言葉には、どこか強い願いみたいなものを感じた。

エピローグ

休日の朝。

亜希子が、真一の仏壇に花を供えていると、スマートフォンが鳴った。電話の相手を見るなり、すぐに出た。

「今、どこなの？」

亜希子は、親しく尋ねる。

「今は、南国にいるわ」

電話の相手は女で、ホテルのプールサイド席に腰かけている。バーテンダーがドリンクを持ってくると、サングラスをしたまま、にこりと笑った。

「いろいろあったけど、あなたの協力もあって、無事に終わったわ。ありがとう」

「これで、本当に終わるのね」

亜希子が、しみじみと言った。

「東京ディズニーランドで会った時だから、もう十年以上もなるわね」

女が、懐かしそうに言う。

「私は、母を騙した秋田博満が許せなかった。だから協力したのよ」

亜希子は、自分の意思を言う。

「母は学生時代、日本で恋人と別れて、イギリスで秋田博満がいる、大学の研究員になった。でも、その時に母は、私を妊娠していることに気付いた。当時の母は、学生で子供を産んで育てるほどの、金銭的な余裕もなく悩んでいた。そこに目をつけて、研究材料にした秋田博満のことが許せない。あの人は、私とあなたが生まれた後、母の面倒を見ることもしなかった」

亜希子は、憎しみまじりに言った。

「その後、母は、ロンドン郊外で交通事故死した。私は、イギリス政府の紹介で、表向きは母の兄夫婦の養子として引き取られ帰国した。あなたは、イギリス政府の施設で生活した。ねえ、教えてくれない。秋田博満は、今の私達の存在を気付いていなかったの？」

亜希子が、疑問に思ったことを尋ねる。

「あなたと私が生まれて、秋田博満は、すぐにイギリス政府に私達を引き渡したの。政府は、私達の存在を隠すために、いろいろな工作をしたわ。そのため、私達の成長過程は、彼にも知りえることはなかったの」

女は、淡々と説明する。

「そう・・・・・・・・ねえ、もう会うことはできないの？」

亜希子が、願うように言った。

「会わないほうがいいわ・・・・・・・・お互いのためにも」
女は、きっぱり言い切った。

「夏彦さんとは仲良くやってね。彼とは、親しい関係になってと頼んだけど、まさか、結婚するなんて思いもよらなかったわ」

女の言葉に、亜希子は恥じらった。

「でも、そのおかげで、福岡教授のそばにすることが出来て、あなたから、いろいろな情報も手に入れられた。それに、あなたが秋田博満を装って、夏彦さんの仕事先に、手紙を差し出したのも効果的だったわ」

「あなたが、計画を実行するうえで、夏彦さんの協力が必要だと言うから・・・・・・・・」

「それから、もう一枚、暗号入りの写真があることを、連絡してくれて助かったわ。ちょうど彼を、日本から出国させるところだったから」

「私、夏彦さんが、彼と会うということを知って、気が気でなかったわ」

「大丈夫だと、言ったでしょう」

「ねえ、彼は、どうなったの？」

亜希子が、心配そうに尋ねる。

「彼は生きているわ。爆破される寸前に、クルーザー内に隠れていたMi 6の人間が、助け出したわ。今頃は、イギリス本土のどこかで、恋人と一緒に過ごしているはずよ」

「そう・・・・・・・・良かった」

亜希子はホッとする。

「今後アメリカ政府は、彼のことを探すことはしないわ。安心して」

「どうして、そう言い切れるの？」

亜希子が気に掛ける。

「福岡教授が、写真の裏に書いたワードは、確かにクローン細胞を作りだす、数式の暗号があるはずなの。でも、そのワードがあっても、細胞を作りだすことは、出来ないことがわかったの。そのことは、アメリカ政府にも伝わっているはずよ」

「どういうことなの？」

「ワードには、福岡教授しか知りえない数式を思い出すための、ものであることがわかったの。つまり、数式は、形として残しているわけではなく、福岡教授の頭の中にある記憶として、残されていたことがわかったの。さすが、福岡教授は天才だわ」

女は感心する。

「それに、イギリス政府とアメリカ政府との間で、話し合いが出来たのよ。今後、両国は協力

し合って、クローン細胞の研究をすることになったの」

「それじゃ、本当に任務は終わったのね．．．．．ねえ、あなたは、これからどうするの？」

「しばらくは、のんびりするわ。でも、今後も政府のために働いてゆくわ。ミス・キャットとして」

女は、笑みを浮かべた。

「亜希子！」

キッチンから夏彦が呼ぶ。

「主人が呼んでいるわ。じゃ、お元気で．．．．．さようなら」

亜希子は、寂しさを感じて別れを言う。

「それじゃねえ．．．．．おねえさん」

女は清々しく言って、サングラスを取ると、亜希子と瓜二つの顔をしていた。

「ずいぶん話こんでいたようだが？」

夏彦が、気になったように尋ねた。

「昔からの古い友人からだったの。つい長話しちゃったわ。待たせて、ごめんなさい」
亜希子は、笑顔でごまかして、仏壇の前から立ち上がる。

「それじゃ、出よう」

今から、亜希子の母親がいる施設に行く。夏彦は、支度を終えていた。

「ねえ、お父様が亡くなられ時、笑っていたように見えたの。ひよっとしたら、お母様のところに行けるから、嬉しかったのかしらん」

急に亜希子が、真一の写真を見て、思い出したように言う。

「うん……それとも、もう一人の息子に会えたからかな」

夏彦は、真一の写真を見て、穏やかな表情で言う。

「あら！ それ」

亜希子が、夏彦の左手の方に目がゆく。

「似合うかな？」

夏彦は照れながら、左手にしているアールドアンドサンの腕時計を、亜希子に見せた。

「とても、お似合いよ」

亜希子が笑顔で答えた。

「親父は優しい男だったと、今は思えるよ」

夏彦は、真一の写真を見て、心からそう言った。

写真の中の真一は、父親の顔をしていた。

完